

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第八十一卷第五号
日本幼稚園協会



5

フレーベル生誕200年記念出版

新刊

フリードリッヒ・フレーベル

岡田正章編

対談者：莊司雅子・平井信義・森上史朗・野辺繁子・穴戸健夫・海 卓子・東喜代雄・白川蓉子・藤井敏彦・利島知可子・西原新一・岩崎次男

A 5 判・344 頁・定価 1,800 円

幼稚園の創始者フレーベルの理論と実践を現代保育の立場から学ぼう。

1982年はフレーベル生誕200年目に当たります。フレーベルは子どもの幸せのために世界で初めて幼稚園を作った人として有名ですが、その実際の姿はさまざまにいわれて誤解を招いています。本書は現在の日本保育界に活躍される先生方に、フレーベルの子ども観、教育観などをさまざまな角度から議論していただき新しいフレーベル観を浮きぼりにしました。

フレーベルに還れ

長田新著 A 5 判・190 頁・定価 1,000 円

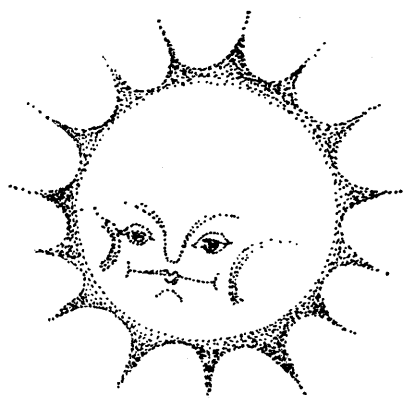
全国学校図書館協議会選定図書

フレーベルの教育目標は、知識の詰め込みではなく、技術を与えることでもない。子どもが内にもっている、何かを作りだそう、表現しようとする、その力を大切にはぐくむことに力点がおかれています。商業主義と結びついた英才教育や、小学校教育を先どりした準備教育が幅をきかせている今日の幼児教育界に、警鐘をならしているかのごとくきかれるのではないのでしょうか。幼児教育の父フレーベルの教育学のエッセンスがあますところなく解説されています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼 児 の 教 育



第八十一卷 第五号

幼児の教育 目次

——第八十一巻 五月号——

© 1982

日本幼稚園協会

守られているしあわせを……………松隈玲子…(4)

私の幼児教育論

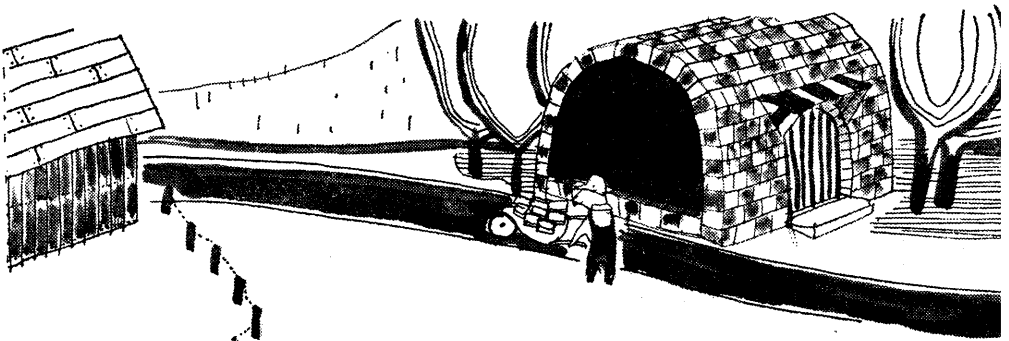
——身体は衣服にまざる——……………太田愛人…(6)

母の故郷 ③

——福永津義・人間とその仕事——……………高橋さやか…(11)

エリクソンと幼児教育 (9)……………仁科弥生…(18)

近代短歌に現われた子ども (一)……………大塚雅彦…(30)



子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑧……………水沼昭子…(39)

子どもの気持の表現にふれるとき (2)

——水遊びを通して——……………唐木久枝…(42)

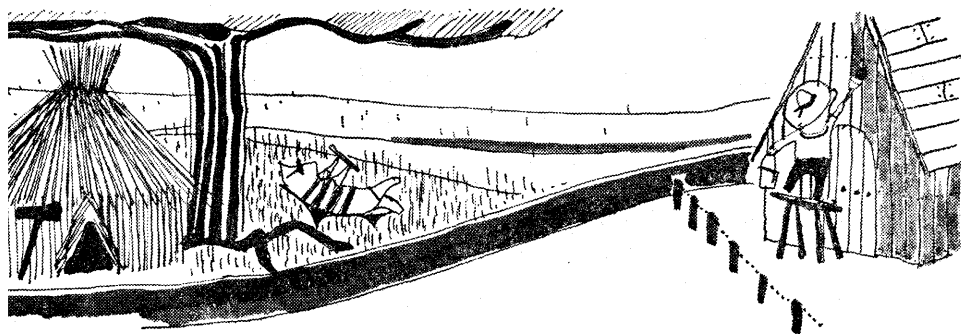
ブリュールゲルの「子供の遊戯」 ⑥

——ナイフ投げから足蹴りごっこまで——

……………森洋子…(50)

「幼児の教育」復刻記念論文審査経過の報告……………審査委員会…(63)

表紙・うすい・しゅん
表紙題字・比田井和子
カット・福田理恵



守られているしあわせを

松隈玲子

(西南女学院)

明るい空、さわやかな風、樹々のみどり、そして暖かい太陽の陽ざし、どの一つにも自然のいのちの育くみを思う五月です。自然界のめぐみをゆたかに受けて、生あるものがそのいのちをいきいきと躍動させるこの月、子ども達と共に身近な自然のうつりかわりや、動植物の成長に心をとめるものでありたいと思います。

四月に入園あるいは進級した子どもたちは、こよみの上ではそれぞれに園生活一カ月をすごしました。入園児にとっては、はじめての社会集団である保育集団への参加という、大切な節目の時であったと言えます。幼稚園、あるいは保育所に入園した子どもたちは、家族集団から保育集団への移行というよりも、家族集団と保育集団との二つの集団の間を往復しながら、それぞれの集団の人やものの影響をうけて成長し変化していきます。子ども達はこの一カ月の園生活をどんな思いですごしてきたでしょうか。一人ひ

とりの子どもにとって幼稚園保育所は楽しい所、暖かい所、そして保育者は慕わしい人であったでしょうか。

入園当初の子どもたちの殆んどは、不安と緊張の連続であり、主體的にいきいきと遊びを展開したり、集団の一員であるという自覚にもとづいた行動をとれる子どもはほんの僅かです。ことに近年は家族集団の核家族化、同胞数の減少、近隣の子どもたちによる小集団あそびの欠如などの要因によって家族集団と保育集団との間に大きな落差を感じる子ども達の数が増加し、ほんとうにその子らしきあらわれるまでにかかりの日数を要するようになりました。表面的には保育者の設定した園生活のリズムにのって集団としてまとまった行動がとれるようになり、園生活になじんだかのように見える子どもたちの一人ひとりをよくみると、自分の思いを十分に出せないまま、保育者の指示どおりに動いている、主體的に集団に参加しているのではなく

て、参加させられている子どものいることに気づきます。

そして今、はじめての園生活での新鮮な体験、ものめずらしさがなくなっていると、努力やがまんのいらぬ家族集団での生活がたとえようもなく恋しいものに感じられ幼稚園にいたくないという思いがつのって、友だちに遊具をとられた、給食のミルクをこぼしたなどという表面的にはほんの些細なできごとが引金となって、登園をしる子どもがあらわれてくるのもこの月です。

進級児においても、新入園児を迎える心構えは頭の中では十分にできていても、実際に新入園児を迎えてみると、なかなか思い通りには事が運ばず、せっかく張り切って門まで出むかえ「おはよう、一緒にあそぼうね」と誘いかけると「いや、こんな人知らないもん」と拒否されてオロオロしていた年長児、自分より小さい三歳児の世話をしようとはり切っていたのに「手伝ってあげようか」というと「自分でするからいい」とことわれしよげていた年中児も、どうにか新入園児との対応になれて、少しずつほんものの進級児としての自覚が育ちつつあります。

この時期保育者は集団の個々の子どもと心理的にも物理

的にも十分にかかわりをもつことが大切です。

碧巖録に「啐啄迅機^{そつたくのじんぎ}」ということがあります。本来は師弟の人格のふれあいによる仏祖の生命を伝える意をもつことばですが、このことばを通して雛の孵化する時期が熟すると雛は内から卵のからを啐き、親鳥が外から啄くように、保育者は子どもたち一人ひとりの成長の節を適切にとらえ、最もふさわしい方法で援助していくことの大切さを学ぶことができます。

成長の節を的確にとらえる目、それは肉眼で見える現象ばかりではなく、見えないものを見る目、即ち第三の目ともいえる心の目です。私たち保育者に要求されるのは、今は外から見えなくても、一人ひとりの子どもがもっている可能性の育ちを大切に見守る目を持つことです。

「心でみなくっちゃ、ものごとはよく見えないってことさ」と星の王子さまにキツネが教えてくれたように、一人ひとりの子どもの心によりそって、子どもと同じ背の高さになり、同じ窓から共に外をみながら、いのちの尊さ大切さをうけとめさせ、たくさんの人やものから守られていることのしあわせを感じる心を育てたいと思います。

私の幼児教育論

——身体は衣服にまざる——



太田愛人

「あなたにとっての師は？」というアンケート調査をまとめた特輯を、ある雑誌で読んだことがある。回答者たちが有名、無名の教師の名をあげていた中に、私の目をひきつけた回答があった。ある外国文学者が「私の失敗」と書いてあったからである。反面教師的な意味をもって、よく考えてみると確かに自分の失敗こそ自分自身を鍛え、教育してくれていると言えるのである。人間は失敗の経験によって賢くなっていくし、二度の失敗を避けるため注意深くなくていくものである。

私の失敗も私の考えや行動に大きな影響を与えてい

る。言葉で弁明するより生活で訂正していくしかしやうのないことも経験する。私は十年前まで、一八年間、信州のアルプス山麓で幼稚園園長をしていた。今でも幼児教育のことを考えると、園長時代の経験が前提になることが多い。そして失敗が最も尾をひいていることを意識している。私の著書『羊飼の食卓』は園長時代の生活記録である。よく、牧師のくせにどうして食い物の本を書くのか、と訊かれることが多いが、牧師（羊飼）は羊に草を与える仕事なんだ、と弁明することになっている。そして羊飼の失敗が食べ物の本を書かせた、と言っても

いい一つの事件のことを思い出す。

それは園児の一人が糖尿病になった事件である。担任の教師にくわしい事情を調べさせたところ、酒好きの老人好みの食事につきあっていたことにあるらしかった。老人が酒飲みがかかる病気にとりつかれた園児を見て、私は頭をかかえてしまった。その家は三方が田や畑で囲まれているところにあり、いわば食糧をつくり出す中で生活しながら、大都市の中で生活しているうちにかかるような病気になってしまったのである。生産から離れて消費に傾いていく風潮が、農業地帯にも容赦なく流れてきている現実を見る。そして、むしろ大都市より農村のほうが都市化からくる消費生活の弊害は大きいのではないか、と考えるようになった。同時に私のやっている仕事にも徐々に変化があらわれてきた。いわば失敗が私の教師となってくれていたのである。

それまで、私は毎週、幼児に聖書の話を教え、毎月、母親たちに聖書講話をして心や精神についての話に集中しがちであった。そして身体について触れることは少な

かった。しかし、聖書の中には身体について言及している箇所が大変多いのである。キリスト教信仰がギリシヤ、ローマに受容されていくと、キリスト教徒は貧しい人びとが多かったにかかわらず自殺や幼児殺しを絶対にしない点で目立ったくらい身体については尊厳は徹底していたし、新しく出来ていく教会について分かり易く説明する際に、パウロは身体の機能を例にとつて説明していたのである。イエスも（人のつくる）衣服よりも、（神が与えた）身体のほうが勝ることを語っている。

残念ながら、日本の伝統的な考え方に衣・食・住の順があり、なかなかこの順は生活の中で変えられないのである。幼児でも食をおさえて衣に執着する気風が徐々に強くなってきて、母側はそれにわをかけたように食うものも食わず着るものに目うつりする傾向が強い。外国から帰ってくる人びとは、口をそろえて日本の、とくに若い婦人層が良いものを着て、食が貧しいことを指摘しているのを私は多く聞いている。身体を養うことよりも衣装で身体を飾ることに熱中させる情報がTVや雑誌で、

辺境まで送られてくるのである。私はだんだん腹をたてはじめた。牧師という仕事上、結婚式を司式する機会が多いのであるが、披露宴のたびに憂うつになってしまうのである。出席者の迷惑も考えず、いつ作ったか分からない御馳走をあてがってにおいて、新婦のお色なおしと称する貸衣裳の展示会を延々と見せつけられ、馬鹿ばかしくなつて慥然としてしていると司会者から拍手を強要される愚かしいくりかえし。もしかしたら、人生の第一歩から衣に対する異様な執着が、家庭の食生活へのしわよせをしているのではないかとすら勘ぐりたくなるのである。

食生活の見識も伝承もうけいれられず、自身または子供を飾ることに駆りたてているような風潮が、何の抵抗もなく農村にまで流れてきていたのである。むしろ、動物の生き方から人間が学んでもいいのではないかと、とすら考えるようになってきていた。そして幼児に関する限り、生活環境は絶対に田舎がいいと説くだけでなく体験させなければならないことに気がつき、食生活の改善と体育の強化を自分なりに考えてカリキュラムに加えるこ

とを試みた。身体を鍛える場所は七百坪の園の敷地は十分であり、体を動かせば腹がへる。「空腹は最上のコック」を生活の中で徹底させることを試みた。人間の出生にこのバイタリティがどうしても必要なのである。幼児期にバイタリティをさまたげてはならないのである。

新渡戸稲造がしばしば語っていた人間の進歩を幼児期からの成長に転用してもいいと思う。「人類ははじめにバイタリティが支配し、次はメンタリティに進み、次にモラリティに進展し、最後にソシアリティに至つて社会共存の理想を達成し得る。」どうやら私は幼児たちにモラリティから説いていたような気がする。私だけでなく、現代社会は、幼児のバイタリティを抑圧してソシアリティやモラリティを強要していたような気がする。そして大人とはいえば、一向にソシアリティを身につけることができず、バイタリティやメンタリティの段階にとどまつて社会の進歩とは金をもうけること、と心得ているようだ。幼児に老人の食物を与えて身体を糖尿病にしているようなことが、精神の領域でもおこっているのである。

幼児期における食事のおろそかさが、後年、成長の段階において肉体だけでなく精神的進歩にもくらしい陰をおとすことになる。食物を買うことだけに依存しないで、作ることが教育上、大きな影響があることに気づいた。

過疎地で生活していると、どうしてもとり残された感じを抱かせられ、大都市に見ならう傾向が強くなってくる。中央から幼稚園にもTV、遊具、教材、絵本、教育書の類が流されてくる。そして、それに抗する術を知らない。森を歩くより絵本の森が本物に思え、図鑑の昆虫のほうに森の中の虫より正確なように見えるしくみになっている。畠から採ってきたトマトより、季節はずれのスーパーマーケットのトマトのほうが上等と錯覚するのと似ている。中心都市の生活より辺境の自然のほうが、どんなに幼児期の人間に必要な環境か分からなくなってくるくらい都市からの情報の威力は強いのである。母親だけでなく教諭までが都市志向に傾いて行き、足元を見ようとしなない。

ある年の遠足で、それまで恒例となっていた塩尻のブ

ドウ園への遠足(?)つぶしの論争を職員会議で展開したことがあった。まるで母親たちのブドウの買い出し団体に幼児がついていくかっこうであり、帰りのバスで幼児は疲労のため居眠りをしているのが目立った。往復百kmのドライブを遠足の美名にかくれて行うことは幼児のためにならないことを知り、町の水道の水源地从ら牧草地を歩き、湖に出ることを提唱し、二日間にわたる討議で決めた。その代り私が先頭にたって蛇追いをやり、湿生植物を教え、水道の源泉を尋ね、蛇の蛇行を観察させ、スキー場を蔽う牧草に寝て、ころがりおちるあそびに興じた。絵本には出てこない野の薫りを幼児にかき分けさせてやるのが田舎の特権といえるのである。保育における自然は、たんに鑑賞の対象ではなく、自己を教え鍛えてくれる場所であることを身につけてもらいたかったのである。教師と園児の間に、沈黙の自然が介在することによって、一人の無言の教師が加わっているようなものである。

このような宝庫を背後にもっておりながらそのことに

気づかないほど、大都市からの教育的な情報が田舎に流れこんでいるのも事実である。あまりにも自然に恵まれすぎていると、自然への飢えを感じさせないことも確かである。客観的に幼児教育における自然や田舎のはたす役割、また食物の評価を知るために、ルソーの『エミール』に着目した。それまでは並の教養書、古典と思って読んでいたのが、一つの失敗によって私には啓蒙書となっていた。時代の差やルソーに含まれている毒を意識しながらも、現場におけるルソー読みは面白く、毎月一回、三年間にわたって職員たちと『エミール』の輪読を行った。大都市における『エミール』読書と違い、目の前に山や畑や野がひろがっている場所で読むのは、一種のこころよさを感じさせる。

「経験 experience は教訓 leçon に先だつ」ことを読み、自分の失敗を反省させられたし、自然を見よ、そして自然が教える道を辿ってゆけ。自然は絶えず子供を鍛える。ことは田舎におればこそ体験できることである。

その田舎では「都会の悪風から遠ざけ田舎で育てたいと

思う一つの理由がある。都会の悪風は表が美しく塗りたててあるから子供にとって誘惑的で感染し易いものであるが、百姓の不作法には少しも虚色が無い」ことを手近に見聞することができた。そして「農夫のように働き、哲学者のように思考しなくてはならない」ことを身にかけていくのである。

都市化の波にルソーをもって防波堤にしようとする努力は無駄かもしれないが、聖書にある、「身体は衣服にまさる」ことを信念として持ち続けることが哲学者のようには思考し続ける一つのきっかけにもなりうるのではないかと考えている。

過疎地と過密地とが人間に及ぼす影響をこの目で見えてきた私は、いま、田園と都市との結婚を目論んでいる。互に美点と欠点を認識することから相互理解が生れ、自己を絶対化することなく、相対的に考えていくことから創造的な幼児保育が生れてくるのではないかと考えている。

母の故郷③

——福永津義・人間とその仕事——

高橋 さやか

Ⅲ 開拓者

日本メソヂスト福井教会に、カナダ・メソヂスト・ミッシオンによって、一八九一（明治二四）年伝道が開始されたといわれ、現在福井神明教会として、昨一九八一年、伝道九十周年を祝う記念礼拝がもたれた。栄冠幼稚園は、一九〇六（明治三九）年、E・C・ヘニガー師が同教会に來任され、ヘニガー夫人によって、その年、開設されている。津義が栄冠幼稚園に赴任したのは、一九一四（大正三）年九月であるから、教会草創の年から二十三年、幼稚園開設から八年目に当る。福井の地にキリスト教がともかくもいくらかの馴染みを持ち、幼稚

園もようやく根づこうとしていた時であったであろう。

当時としては高度の教育をうけた（小学校を出て、初等科四年、中等科四年、幼稚園師範科二年、の学業であった）幼稚園教育の専門家として、地域の通念的な成年男子の場合より高給を似て遇されたというから、幼稚園を運営するには、ミッシオン・ボードが相当の熱意をもって補助をつづけていたのではないかと思われる。

ヘニガー夫人が開かれた当時最初の入園生が五名であったという記録があり、一九二八年幼稚園の二十周年祝賀の記念写真にのこる、園児と見られる子どもたちは、約五十名が数えられる。残念ながら、津義の在職当時の園児数は、いま詳らかに知り得ない。ただ、当時のキリ

スト教幼稚園のあり方として、一クラス二十名を越すことは考えなかったと推量される。三クラスとして六十

名、教師は、三歳児クラスなら二十名の子どもに対して二名、四歳五歳には一クラス二十名として一名配属されていたであろう。主任保母はクラス担任とは別に、すべてのクラスに対して保育の責任をもつものであったであろう。牧師か宣教師あるいはその夫人が、園長として最終責任者であったと考えて間違っていないのではないかと思われる。(このシステムは、一九二六年、津義が神

戸須磨の地で、夫盾雄を設立者園長として「早緑幼稚園」を開設したとき、三年保育三クラス六十人定員、保母を、主任としての自分の他に四名おいたことで、幼稚園とはそういうものとして問題なくそのように認識していたと考えられるのである)。——多分、一九一四——一九二二年(間で一九一八・七——一九一九・八の一年間は活水に帰っている。一九一九・九にまた栄冠幼稚園に再任、一九二二年まで在任した。ついでにふれさせて頂けば、筆者が生れたのは福井を去る一年前の一九二一年八

月である。)の、津義の在職時代、園児数は三十名から六十名の間を前後していたのではなかっただろうか。

当時、保育料は必ずしも安くはなかったかもしれないが、しかしまた必ずしも「お金持の子」でなければ行けない、というのではなく、社会に好意をもち、教育に関心のある家庭の子どもが入園して、教会の婦人会の活動と並んで母の会の活動も活発であったと見られる。そのような方方は、ミッション・ボードの熱意あるバックアップなしには成立しなかったであろう。

津義は、福井時代の上司ともいべき高北三四郎牧師こうきた、ホームズ宣教師に、のちのちまで尊敬とともに深い親しみを抱いていたが、とくに長崎から福井に着任早々、ホームズ宣教師は度々家庭に招いて食事も共にして下さり、温く遇されたことは、忘れ難い思い出としてのちの日にも屢々語ったところであった。

津義の栄冠幼稚園赴任は、そのように形容するのはいささか気が障すけれども、相当に期待され敬意をもって迎えられた若き気鋭の保育者、という感があり、ミッシ

モン・ボードの庇護^{うしろなで}後盾もあって、のびやかに堂々と自分の信念・主張を着々実践にうち出していったものと思われる。

具体的な保育内容としては、童唄・民謡をとり入れたあそびとフレーベルの「母の遊戯」とを併用した遊戯——歌と動作・ゲームを組み合せた活動、マーチ其他リズム曲に合せたリズム活動や体操、また音楽鑑賞。談話——童話をきかせる場合も、それはきき手の子どもたちと交流しあう談話でなければならぬ、とし、会話や見聞なり意見なり思いなりの発表・報告などの発語発話の誘導にも大いに意を用いたと思われる。散歩・野外保育による観察教育と身体活動（体育）にも熱心であったであろうし、ごっこあそび劇あそびも半ば自然発生的ともいえるほど、自由な雰囲気の中で誘導されたに違いない。自由といえば、極めて自由な扱いで、恩物も活用されたであろう。製作活動はやはり概ね恩物^{おんぶつ}に即したものであったであろう。花壇の世話や動物の飼育もとりあげられていたであろう。鶏や鳩は、「雛をよべ」「鳩をよべ」が

「母の遊戯」にあるところからも、実際に飼うことに容易に結びついたであろう。それに、昔は鶏を飼うことは、別に幼稚園でなくても、多くの家で、二、三羽、数羽くらいはごく普通に飼っていたとも思われるから、園で飼うことも自然であったのではないだろうか。草摘みと花束や頸飾^{けいじ}りづくり、ままごと、色水づくりなども、草笛葉笛や、草相撲、笹舟など、松ぼっくりやどんぐり工作なども、そんな自然物を使つての遊びや工作も「母の遊戯」からの派生活動としてごく日常的にとりあげられたであろうと推察できるようである。

福井時代の保育については、実は具体的にあらためて聞き直したことはなかったので、これも到底詳らかに承知しているといえるようなものではない。むしろ、何も知らない、と言ふべきである。しかし、神戸時代のやり方からみて、——そのやり方が、如何にも自然当然に、ことさらに形を作るといふようなところのない、恒常的なものとして実施され維持されていたところから、活水時代福井時代の最初から（高森富士直伝の）保育の基礎

理念・実践形態ともに、揺ぎのない確かな核心・骨組を堅持していたと想定できる。

全く、津義にとって、保育の道は、最初に門口に立ったとき、真実の道にまっすぐふみ出すことを得たのであって、歩みを進めれば進めるほど、経験すればするほど、その道以外の道はない、というていのものであった。そう言っても津義の、保育実践のやり方は、その時その場——環境のあり様、当の、自分に委ねられた子どもたちのあり様に対応して、極めて現実的で、見方によれば変化に富んだものであった。

津義のユニークであったところは、「母の遊戯」にせよ「恩物」にせよ、書いてある通りまたは教わった通り、という形式従属的なあり方はほとんど眼中になかった、と思われることである。

さきにふれたように、ブローウの英訳「Mother play」に大いに共鳴を覚えたと思われるのであるが、その英訳がかなり意識的であることを、却って我意を得た思いで受けとめたのではなかったか。津義自身、「手足のあ

そび」「指あそび」「味の歌」「小さい橋」「魚すくい」

「かっこう（かくれんぼ）」など、「母の遊戯」から抽き出して、極めて日常的な（日本の）どこにでもある家庭や、家並の間の露路や、草地（広っぱ）や川原の、子どもたちの自然発生的なあそびの中にこともなげにとり入れ融合させて、少しも教師側の「教える」意識、子ども側の「教えられる」意識を角立たせることがなかった。

フレーベルに忠実であることと、保育また日常生活活動との、自然極まる融合、——その両立は、津義が、フレーベルに真底学び従いながら、常に自分自身でありつづけたことを立証していると思われる。

そういうならば、彼女は彼女流のフレーベル教育を実践したのである。一般には、それでは、真正のフレーベル主義ではあり得ない、といわれるかもしれない。

津義は明らかに、彼女自身常に、自分の道を自分でうち拓きながら一歩一歩進む一面をもっていた、といえるようである。彼女はある意味で、両親にも、先輩者にも、職場にも、恵まれていた。すぐれた両親、すぐれた

先達者、そして少くとも最初の職場では優遇を得たのであった。しかし一方では、両親は生活において重い苦勞を負って通常の意味では子女を顧りみる余裕には乏しい状況下にあったのであるし、彼女が天職とも心得た保育は、何といつてもまだ世に行われ認められること寡^{すくな}いといふのみであつた。

六十歳を越える後年になつても、津義は、母の会の集りで話をし、話を聞くことに熱心であつた。それは、福井時代から、二十代の、まだ結婚もしない中から、彼女の重要な保育の実践活動の一環であつた。

園に来てゐる間だけ、子どもたちを保育すれば、それで保育のいとなみが成り立つのではなかつた。「保母……いい名まえね。母を保つ女、まさしく、役割を十全に言い得ている職名だと思ふよ」と話したことがあつた。戦後になつて、女偏がとれた「保母」の文字は、いくらかものたりなく思へたのではなかつたらうか。

フレーベルが言う「叡智ある母」子どものために神自身^{みづかみ}がそのように使命を与え負わせた神の代行者である

母、その母が神から与えられた使命に目覚め、使命を自覚し、同じく神の愛によつて生命ある存在であるところの子どもに対応することこそが、最も必然的な保育の「あるべき様^{よう}」である、と津義は理解していた。保母としても母としても、自分がそうあるべく全身全霊をあげて尽瘁^{じんさい}したし、かつ、接するほどの子どもの母たちに、「叡智ある母」であるように、共同をよびかけずにはいられたのであつたのである。子どもを保育することは、同時に子どもの母たちを母らしく保つことと、二つには分けられなかつた。そしてフレーベルの「母と遊戲」は、母親教育のテキストとしても熱意をこめて津義によつてとりあげられたものであつた。子どもの母たちと保育において共同する以上、なお一層、同僚同士の共同が当然であつたことは言うまでもないであらう。今日という保育者集団の自然的な成立が、そこにあつたと思われる。

クリスマスの準備に、戦前は「キレー紙」とよばれていた、うすい生漉^{きず}の紅白の紙——上質の、いわば化粧紙（今日のティッシュペーパーが用途的には近いものといえ

ようか)で、ばらの造花を作ることがあったが、それにかかわる思い出として、福井時代の、ある雪の夜、——やはり、近づくクリスマスの準備で更けるまで、保母たちと母の会の有志たちと集って手仕事をつづけていた、しんしんと戸外は冷えまさっているだろうと話しながらしかし室内では談笑のうちに作業がつづき、ふと気づくと、表戸を誰か叩いている、……立っていつてあけると、「あ、雪女——って、本当にそう思ったよ。とてもきれいなひとで、細っそりした身体つきで、指も細くて白くて、……」事情があつて家を出て来、他の土地へ行こうとして、夜道をつづけるのに堪えかね、明りのもれている大きな家、と思つて、園舎の戸を叩いたと言う。一晚泊めてあげて、翌朝はもう発つていつてしまった、その一晚に、皆がしている装飾つくりを手伝うといつて、キレー紙のばらを手際よくあとからあとからつくりつけ、壁にあふれるほどの花飾りが出来た、そんな思い出話をすることがあった。この話自体、そのように語り聞かされると、甚だロマンティックな夢のような、ほとん

どつくり話のように聞えるが、別につくり話をしなければならぬわけもなく、それ以来、うす紙のばらづくりは、ずっと毎年クリスマスの室内装飾の一部につくりつけられてきた……本当の話なのであった。

このような、ごく僅かな断片的な話の端ばしから、そしてややものごころついて直接見聞した神戸の早緑幼稚園のあり様から推して、津義の保育が、福井時代から一貫して、フレーベルに忠実であると共に独創的であり、同僚や母の会のひとたちと話しい学びあい協力(あらゆる子どもの生活にかかわることにわたつて)しあつて、地道に活発に発展してゆくものであったことが思われる。それは、誰もあまり知らなかったこと、わからないうでいたことを、実践してみせ、かつ話しいを通じて理解してもらい、興味や親しみのきもちをよびまし、……という風に、そう言うならば説得力のある啓蒙活動によつて、園児たちの活動は勿論同僚ぐるみ母親ぐるみの園生活を推進してゆくあり方、と言うことができるであらう。

一九二二年の終りに、牧会を退いた夫盾雄とともに津義は朝鮮・開城に渡る。開城市にあったホルストン高等学校で教鞭をとることは、渡鮮前に決っていた、というより、その職があつて開城に行くことが定つたのもあつたろうか。盾雄も教職についたようである（筆者の満で十四になろうとする夏に父はなくなつた。母の履歴書は何度も見る機会があつたが、父の朝鮮時代の職についてはつい聞かず知らずじまいである）が、盾雄がなそうとしたのは、教会の組織の枠から離れて朝鮮という地で開拓伝道を志したのではなかつたか。「朝鮮の地の、埋め肥料になるつもりだ」と盾雄は当時知友に語っていたという。津義は、見方によればそういう青年らしい客気に勢う夫の生き方を、進んで支持した。関西学院神学部を卒業してまもない、初任地の輪島で一年、福井でも足かけ三年になるかならずの牧師生活を、ふり切るようにして渡鮮するという行動の内側に、植民地に対する権力機構の理不尽さへの怒りや圧迫者側に属する贖罪的な意識、真のキリスト者・伝道者が、教会教派の枠づけの中

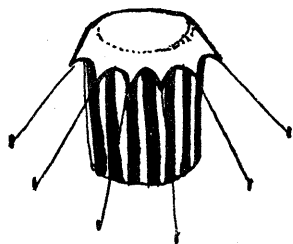
である意味で安穩無事につとめることへの反撥、そういったものがあつたと、津義は理解していたようであつた。盾雄にあつたと思われるかなり尖鋭な社会主義的な意識は、津義においてはみられない、といつていいようである。しかもなお、津義は、その時その場の現実に向して、理想へ向つて（善きもの正しきもののそしてなすべきことと判断する方向に頭をあげて）進むことについて果敢であつた。しかし、開城に住んだのは一九二三―二六の足かけ四年、志は成らなかつたといわなければならぬ事情のようである。

一九二六（大正一五）年五月、盾雄と津義は、神戸市須磨に移つて、幼稚園を設立・自営することになる。賀川豊彦氏の助言があつたこと、津義の活水初等・中等科時代の親友武藤みをが神戸に住んでいたことなどが、朝鮮を引きあげ神戸に、という誘因であつたろうか。A・L・ハウ創立の頌栄、またランパスという二大キリスト教保姆養成校の所在地である神戸は、まさしくキリスト教保育の先進地でもあつた。

（西南女学院）

エリクソンと幼児教育 (9)

仁 科 弥 生



「エリクソンと幼児教育」という題名からいえば、彼の心理社会的発達段階についての考察の範囲は、前回の移動と性器期までということになる。そこで今回から、エリクソン理論のいくつかの重要な概念を取りあげて、それらと幼児教育との接点に焦点をしばって、話をすすめていこうと思う。

彼の理論の難解さやその概念のとらえにくさ、また多岐にわたる意味内容を包含する彼の用語の定義づけのむつかしさは多くの人がほぼ一致して認めるところである。たとえばラポートも「精神分析的自我心理学の歴史的展望」(一九五九年)の中で、エリクソン理論は、臨床的な精神分析の命題から、より一般的な精神分析の心理学の命題にわたっているが、その系統化が不十分であり、また、理論上の用語の概念上の位置づけも不明瞭である。理論の系統化と、用語の位置づけの明確化が今後の課題の一つであろうと指摘している。エリクソン自身も、『幼児期と社会』の初版のまえがき(一九五〇年)で、本書が概念的探求の道程であること、そして、その

第二版のまえがき（一九六三年）では、一人の研究者の遍歴の第一段階の記録であるために、理論の展開に十分なところも多いことを認めている。そして事実、彼の諸概念は、その後の彼の精神分析家としての精力的な臨床経験と深い思索とによって一層、それらの意味内容が推敲され、豊かにされていった。したがって、以下に述べることはある用語の概念のすべてを包括するものではなく、主に『幼児期と社会』『自我同一性』『洞察と責任』など一九五〇年代から六〇年代にかけて発表された彼の論著にもとづいたものであることをあらかじめ明記しておく必要があると思われる。

自我の概念について

先にふれたラパポートの論文を参考にして精神分析学における自我概念の変遷を辿ってみよう。

フロイトの初期の自我概念はまだ素朴なものであった。たとえば、彼は「自我」egoという言葉で、その時

その時で人格 *person*、自己 *self*、或は意識 *consciousness* などの同義語として用いていた。しかし彼が精神分析学において理論化しようと試みていたことは意識の心理学ではなくて無意識の心理学であった。そして心を無意識、前意識、意識の三つの精神的システムによって構成されているとする局所論を提出したことはよく知られている。この段階では、フロイトは、自我は常に意識されており、本人にとって不快な観念や情緒を抑圧するという前提に立っていた。しかし抑圧過程の分析によって、自我による抑圧の働きが患者には意識されない場合のあることが明らかになるにおよんで、自我⇨意識⇨抑圧するものという前提の修正が必要となった。そして「自我とエス」（一九二三年）において、彼は心はイド、自我、超自我という三つの体系から成り立つとする自我の構造理論を展開させた。「イド」の概念は、人間の感情、思考、行動をうながすすべての無意識的な衝動の根源をなし、生物学的、本能的なもので、その世界は無秩序で興奮に満ちているというものである。「超自我」は

いわゆる「良心」と呼ばれるものに相應する。それはイドからの本能的衝動に対して禁止と威嚇を行うが、その機能はほとんど無意識的であると考えられている。ここの「自我」は、本来は、知覚意識系の周辺に組織づけられるが、同時に抵抗を引きおこす無意識的であるような構造を内包し、自分の自由になる中性エネルギーを所有し、本能的衝動のエネルギーを自我自身のエネルギーに変形することができると想定されている。そして自我の本質的な機能は人格の中の管理者として、イド、超自我、外界という三つの領域からの刺激を調整し、バランスをとる役割をもつと概念化されている。つまりイドからは直接的、即時的充足を求める本能的衝動の突き上げ、超自我からは道德的、倫理的命令、そして外界からはさまざまな刺激や誘惑が子どもの心に集中する。そして幼い、まだ未熟な自我はこれらの圧力に翻弄され、まるで下僕のように働かねばならない。しかし自我も成長するにつれて、従順な下僕からやがて支配者になるというのである。

さらにフロイトは、そのためには、第一に身体的成熟、主として中枢神経組織の成熟と、第二に、外界対象とのさまざまな体験が必要であると考えた。そして、イドの世界を支配している機能様式を一次過程と呼び、イドから分化した自我の主たる機能様式を二次過程と呼んだ。一次過程が主に快楽原理に従うのに対して、二次過程は論理的法則に従い、言語によって表現され、現実原理に従うという。この二次過程の概念は本能的衝動から独立した自我の発生的根源を意味しているわけではなく、むしろ現実経験だけによって一次過程（つまり本能的衝動）に課せられるものとみなされているとはいえ、それは、後の現実との関係の概念を準備するという意味で重要であると、ラパポートは評価している。しかしフロイトによるこのような自我の概念づけには重大な欠点もあったとラパポートは指摘している。すなわち、第一に、依然として自我は、イド、超自我、現実などの圧力の所産とみなされていること。第二に、ある種の独立した発生的な根が自我に帰せられているとはいえ、それは

イドから分化するものとみなされていること。つまり出生時は人間の心はイドのみから成り立っている。自我は本来イドの部分であって、成長する過程で分化してくると考えられている。第三に、自我を發生的に考察してはいるが、自我発達に関する漸成論的な概念づけは、リビドー発達の漸成論的な概念づけに比べて、まったく問題にされていないことなど。

しかし、このフロイトの自我の概念も、その後、彼自身の手によって修正された。「不安の問題」(一九二六年)の中で、フロイトは、自我がイドに全面的に従属しているという概念づけを否定した。自我は、自律的に不安信号によって防衛を発動させ、発達の過程が進むにつれて、受身的に経験した不安をしだいに能動的な予期という形に転換させることができるようになり、自己自身の目標を追求する快樂原理を用い、自由に、思うままに使いこなす多様な防衛をもち、究極的には現実関係(つまり適応)に関心を向ける。その結果、本能的衝動によって促進される行動が現実の危険に直面しそうになる場

合には、自我は本能的衝動を抑制するとされる。この自我理論によって、フロイトは、現実と本能的衝動と自我の関係に統一的な解決を与えたのであった。そしてまた、現実の危険との関連の中でのみ、自我が機能するという形に制限されているが、ここで適応の概念づけはじめて示唆されたのであった。

このように、フロイトは、二次過程という言葉で、そしてまた危険状況と関連づける形で、現実関係の最初概念づけを示したが、それを適応という概念にまで一般化することはなかった。フロイトの歿後、その継承者たちの中で、ハルトマンやエリクソンが、精神分析以外の観察法や実験までもその研究方法に取り入れて、フロイトが提出したこの現実との関係、つまり適応の理論、とりわけ対人(心理・社会)関係理論の明確化に着手し、自我の自律的発達とその能動的な適応の機能に関する理論を發展させたと、ラパポートは概観している。

ハルトマンは、本能的衝動から独立した自我発達の生得的な発生という概念を理論づけているが、彼や彼の協

同研究者たちの理論についてのラバポートの解説を要約すると、次のようになる。

一、ハルトマンたちの概念では、自我はイドから発達するわけではなく、自我もイドも、ともに共通の母体から分化する。その母体は、胎児期以後の発達の最初期の未分化な段階にある。

二、ハルトマンは、自我発達の独立した根を、一次的自律性をもった自我装置とみなした（たとえば感覚、認知、運動の諸機能や特殊才能などを自我の生得的な発生基盤とみなしている）。そしてこの自我装置は発達の最初期の未分化な段階にすでに存在し、分化するにつれて、自我の主要な統制や執行の装置になると考えられている。

三、これらの装置は外的現実、すなわち「期待可能な平均的環境」と協調性をたもつための生得的な手段である。この協調を「適応状態」として概念づけている。つまり、この適応状態は、葛藤に先行するものであって、葛藤解決の所産ではない。したがって自我は現実経験に

よって本能的衝動から派生するものではないのである。こうして、ハルトマンは、現実原理に従う自我の機能様式Ⅱ二次過程が相対的な自律性と適応性をもつことを概念的に明確にしたのである。

四、同時に、葛藤状態に由来する自我の構造と機能も衝動からの自律性を獲得しうるという事実をも認めた。たとえば、排泄のしつけにおいて、最初は防衛としてはじまった幼児の心的過程はその目的が衛生上の習慣と規律正しさの維持に変わるとき、適応的自律性を獲得する。ハルトマンはこのように機能の変化という概念で自我の働きを説明し、これを自我の二次的自律性をもった装置と名づけた。

したがって、ハルトマンは、自我自体が発達の基礎をもつことを認め、受動的なものとしてとらえられていた自我に、現実との関係を調整する能動的な適応機能を認め、それらを理論化したといえよう。

では、エリクソンは、「自我」をどのようにとらえ、また自分の理論をフロイトにどのように関連づけている

のであろうか。

『幼児期と社会』の中で、「本書は自我が社会と結ぶ関係についての精神分析学の書である」とはっきり言及しているように、エリクソンの関心は、自我と現実との関係、ことに実際の社会的現実における自我の役割の理論化にあったことは明らかである。また、『自我同一性』の中で、フロイトの自我と社会との関係のとりえ方に言及して、エリクソン自身の自我理論の立脚点を明らかにしている。以下、エリクソンの言葉を引用しながら、そのおおよそを述べてみよう。

「フロイトの自我の概念は、当時もっともよく知られていた二つの対立者である生物学的なイドと社会学的な〈大衆〉 *mass* に関する既存の定義を用いて記述された。つまり、自我はその個人が経験を組織づけ理論的な計画を立てる中枢であり、原始的な本能の無秩序さと集団精神の無法さ双方からの危険にさらされていた。」したがって、初期のフロイトは、自己の内なるイドと自分の周りを取り囲む群衆との間で恐れおののく自我を想定し

たということもできるとエリクソンはいう。また、「群衆によって取り囲まれた人間の不確かな道徳性を説明するために、フロイトは、自我の内部理想や超自我を設定した。ここでもまた、はじめのうちは自我に押しつけられる外的な圧力が強調された。フロイトによれば、超自我は、自我が従わねばならないすべての拘束の内在化である。つまりそれは、両親の、後には教師たちの、さらには初期のフロイトにとって、〈環境〉や〈世論〉を構成する同時代の不特定の仲間の民衆であった人々の批判的影響によって、外部から子どもに強制されるもの」であった。

そしてこのような強力な非難に取り囲まれる結果、子どもの素朴な自分への愛情にみちた根源的な状態は傷つかざるを得なくなる。子どもは自分自身を評価するモデルを探し求め、そのモデルにあやかろうと努力することに幸せを見いだそうとする。子どもはこの試みに成功すれば自己評価を得ることになるが、すでにこの自己評価は、子どもが本来もっていた自己愛や万能感そのもので

はなくなっているとフロイトは考えたのであった。

これらのフロイトの諸概念は、臨床的な精神分析の方向や目標を決定しつづけたが、その後、変動する歴史的現実とともに、精神分析的諸概念も変遷する運命にあった。これについて、エリクソンは次のように述べている。「人間の動機を説明する分野で、同じ用語が半世紀以上にわたって使われてきたとすれば、それらはこの概念がつくられたその当時の時代のイデオロギーを反映するだけでなく、その後の社会変動に伴うイデオロギーの変遷も吸収せざるを得ない。それは人間の現実検討器官としての自我についてもいえることである。」そして、エリクソン自身、無組織な人間の集団の中での自我ではなくて、組織化された社会生活の中での幼児の自我の起源とその発達の研究に向ったのである。すなわち、社会組織がどのように、幼児の生存を保証し、特有なやり方でその欲求を管理し、固有な生活様式に幼児をとり込むのか、またそのために、社会組織はまず最初に一体何を幼児に許容するのかなどに注目した。そして、エディプス

仮説を導入せずに、社会組織が家族構造をどのように規定するかを説明することによって、人間の非合理的行動を説明することのできる図式を描こうとしたのであった。もっとも、この方向づけは、晩年のフロイトによっても示唆されていた事実には、エリクソンも言及している。すなわち「超自我の中に働いているのは、両親の個人的性質のものだけではなく、両親に決定的な影響を与えたものすべて、すなわち、彼らが生活している社会的階級の趣向や価値規準、彼らが人となった民族の特性や伝説などである。」と「精神分析学概説」(一九三九年)で述べている。

こうして、本考察の初回に心理社会的発達段階の解説の中で述べたように、エリクソンは自我の漸成論的発達を体系づけた。それは身体部位の器官様式と、その様式の漸成的発達という概念を導入し、人間の八つの発達段階に特有な発達課題の解決に社会が影響を与えるその主要なメカニズムを明確にすることによってであった。すなわち、ある段階につよく現われる器官様式(取り入

れ、保持、排出、侵入など）がその最初の器官や部位から別のところへ般化し（置換えられ）、やがて本来の起源から切り離されて自律的なものになる、つまり、二次的自律性を獲得する過程を理論づけた。そして、それら器官様式がその社会の育児制度によって影響され、その社会に特有の行動様式（受けとる、与える、放す、作る）に機能変化して、二次的自律性をもつ自我の装置、すなわち個人の行動様式となることを明らかにしたのである。換言すれば成長する個体は、その所属する文化の特定の育児様式との出会いを通して、個体の生得的な接近の様式をその文化の社会的行動様式に適合するように変形させていくのである。このように、エリクソンは自我の発達を社会機構との関連を強調して漸成論的に体系づけたが、その自我の二次的自律性の考え方は「機能の変化」というハルトマンの概念の特殊例であると、ラポートは位置づけている。

次に、エリクソンは「自我」の機能をどのように定義づけているのであろうか。

『幼児期と社会』の中で、彼は「自我」という言葉を精神分析学上の起源に関連させてその定義づけを試みている。要約すると、おおよそ次の通りである。

精神分析学では人間が抱く過度の願望の圧力にイドという名称を与え、良心が加える過酷な力に超自我という名称を与えている。フロイトによれば、イドはわれわれを「動物に過ぎないもの」にするすべてのものを指していた。またそれは、半人半馬の怪物、ケンタウロスが馬身に束縛されているように、自我もこの非人間的で、獸的な層に拘束されていると感じるといふフロイトの仮説を示すものであった。ただ、ケンタウロスは自己の馬身ができるだけ有利に利用するが、自我はこのイドとの結びつきを危険と考え、重荷に感じるのである。

心のもう一つの構成要素としてフロイトが認知した超自我は、良心の要請をイドに抵抗させて、イドの表現を制限する一種の自動調整機能と考えることができる。ここでもはじめは、超自我によって自我が負わされる異質の重荷が強調された。なぜなら、自我の一段上位にある

超自我は「自我が屈服しなければならぬすべての制限の内在化された総計である」と考えられていたからである。たしかに、われわれが自責や憂うつの念にかられているとき、超自我は自我に対して非常に古風で野蛮な方法を用いるために、それらは盲目的で衝動的なイドの手段と類似したものになることがあるからである。

しかしながら、エリクソンも指摘しているように、このイドと超自我という二つの力のどちらかに個人が支配された場合の二つの極端な状態の中間にある比較的均衡のとれた状態については、精神病理学として発達した精神分析学はあまり知見をもっていなかったのである。そしてエリクソン自身は、この「中間の状態」をいわば演出する自我の機能に注目し、その解明に論議を集中させたのであった。

エリクソンにとって自我とは次のようにとらえられている。

自我は、イドと超自我との間にあって、たえずこの両者の極端なやり方を調整し、平衡を保たせ、或はそれら

を受流しながら、歴史的連続性の中に存在する日々の現

実に調子を合せ、知覚を検査し、記憶を選択し、行動を

支配する。その他にも、各個人が自分の立場を見定め、

計画を立てる能力を統合する役割も果たすのである。ま

た、自我はそれ自身を守るために「防衛機制」を用いる。これは本人には無意識の機制である。そして個人が

欲求の充足を延期したり、代償を見いだしたり、或はイドの衝動と超自我の強制との間に妥協をもたらすことを

可能にする。そのような防衛機制の一例として、怯える

といつも攻撃的態度に出たり、狼狽させられることを恐

れて知ることを避けたいような情報に対して、不安にか

られながらもかえって執拗に質問を浴びせかけた三歳の

サムの「対向恐怖症的」防衛をあげている。しかし、エ

リクソンは防衛機制は自我の一つの防衛的側面にすぎな

いと考えている。したがって、自我とは経験をまとめ、

突然おそう衝動と過酷な良心の必要以上の圧力の両方か

らこのまとまりを守る内面的な心的統制であるといえる。

それは自分の内面的生活と社会生活の二つの面を一つに

結びつける内的器官として概念化されている。

このエリクソンの自我の概念をより具体的に理解するために、幼児期における自我の破滅の事例としてエリクソンがあげたジーンの場合を次に紹介しておこう。

ジーンは堅さと唐突さがきわだつ華奢な六歳の少女である。彼女ははじめて治療者（エリクソン）を訪問したとき、その家中の部屋を次から次へと走り抜け、ベッドがあると片端からめくって枕を探した。枕を見つけると、それを抱きしめ、小声で話しかけ、空ろな声で笑った。彼女は「分裂病患者」であった。

ジーンの知覚の認識が極端に乱れはじめたのは、実は母親が肺結核を患って病床についてからのことであった。母親は自宅で療養することを許されていたが、この娘は乳母に抱かれて、病室の入口から母親に話しかけることができるだけであった。この期間中、母親は娘の何か自分に訴えたい様子を感じとっていたが、どうすることもできないでいたという。そして自分が発病する少し前に、ジーンの最初の乳母に暇をやったことを後悔し

た。新しい乳母は気だてのよい女ではあったが、頑固で、しかも精力的で、いつもあわただしく赤坊をあちこちと動かしていた。それを母親は病床からはらはらしながら見守るだけであった。またこの乳母は、子どもに注意を与えるときは、たいそう大仰であった。きれい好きで、子どもが床の上をはい回ることを許さず、もし手足が少しでも汚れようものなら、まるで船の甲板を磨くように、子どもをこしこしと洗った。

四ヶ月間、母親から分離された後、ジーンは再び母親の部屋に入ることとを許された。そのとき、彼女は生後一年一ヶ月になっていた。彼女は小声で囁くように口をきくだけであった。ボールが床の上をころがるのを見ておびえ、紙がバリバリ音を立てるのにおののいた。しだいにこの恐怖は他の対象へも広がり、灰皿やよごれたものにはけっしてさわろうとせず、やがて周囲の人にさわったり、さわられたりすることを避けるようになった。

したがって、この子どもの枕への愛着は、彼女が母親の病床へ近づくことを禁止されていたあの時期と関係が

あると思われた。そしてすべての人との接触から逃避するという様式で、彼女はこの事態に「適応した」のである。母親に対する愛情を枕に対する愛着という形で表現していたと考えられた。

このような子どもは、自分の感覚器官や生活機能を敵視し、「外部のもの」として拒絶する。彼らは意識界に押し入ってくる不穏な衝動や、圧倒的な感動を制することができない。そこで、それらを自己の内部への侵入者とみなしたり、自分の外界との接触や意志の伝達のための諸器官を敵視したりする。このような場合、母親が適切に、しかも一貫した態度で子どもを勇気づけることによってのみ、子どもの自我は自分の諸器官を統御できるようになり、またそれら器官で社会的環境を知覚し、信頼をもって社会的現実と交わっていくことができるようになるのである。実はジーンはそれまで両親と離れて、専門の看護人の世話を受けていた。そこで治療者の提案によって、ジーンは家族と一諸に住み、母親が彼女の世話をし、治療者がその家庭を定期的に訪問して指導する

ことになった。

ジーンは母親の世話に気づき、親密な接触を取りもとそうと試みるようになった。しかし、その関心の示し方や、選ぶ対象はやはり唐突であった。彼女が示した最大の関心の的は母親の乳房であった。彼女は母親の膝に座って乳房や乳首をいたずらっぽく指で突いた。そして読経口調で歌をうたった。その歌は、母親の胸の包帯（ブラジャー）にさわると母親が痛いおもいをするという考えに彼女がとらわれていることを示していた。しかもその歌の言い回しの絶望的な激しさから、母親が「胸の病氣」になったのは自分が痛くしたからで、母親は傷ついた印として「包帯」を胸に巻いており、それが理由で自分は母親の部屋から締め出されたという考えを伝えているようであった。そしてしだいに自己懲罰的になり、自分の「指を切り捨てる」よう要求するようになった。母親は、自分の病氣はジーンのせいではなかったことを根気よくジーンに説明した。そして万時に世話や配慮をくばった。ジーンは母親を信頼しはじめ、著しい回復を示

した。七歳になるころには、自分の指が取り返しのつかないような害を与えるはずはないと感じはじめ、さらに、ものを習ったり、美しいものを作ったりするために指を使うことができると思いはじめた。そして、指の遊びに夢中になった。それは「この小豚さんは買物に行く」「あの小豚さんはエスカレーターに乗る」など、小豚たちに彼女が日頃していることをやらせることであった。こうして彼女は自分の指を引合ひにして、時間を統合することを学び、また違った時間にいろいろ異なったことをしてきたさまざまな自己の連続性を確立することを学んだ。これは、ジーンの自我が、ある出来事が起きたとき、その起きたことの確実性が充分に与えられなかったというそれだけの理由で、それを試すことを繰返すことによって、経験を統合しようとする必要に支配されることを物語っている。したがって、ジーンは、自分の指を使って、意志の伝達と共に、そのような経験の再統合を成しとげたのであった。

以上のように、ジーンのエピソードには、幼い、弱い

自我が自己の統一を求めて苦闘する姿が描かれているが、自我とは「人間の経験や活動を環境に適応する行動に統合する能力」を意味する概念であるとまとめることができよう。それは個人の内部の秩序を守るために発達した「内面的機構」であり、「その人個人」ではなく、またその人の個性でもない。もっともその個性にとって欠くことのできないものではあるが。

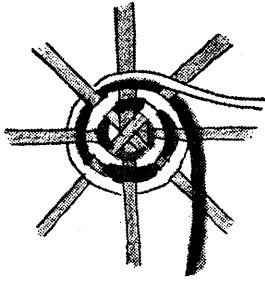
かつて、フロイトは夢の研究が大人の無意識への王道であると言った。エリクソンは子どもの自我を理解するための最善の手がかりは、子どもの遊びの研究であると述べている。今回は「遊び」を中心に話をすすめよう。

(津田塾大学)

☆

☆

近代短歌に現われた子ども (一)



大塚
雅彦

はしがき

私は学生時代から長い間短歌を作り続けているが、過去の歌人たちのすぐれた作品を読むのも好きで、ひまさえあれば短歌史上の作品に親しんできた。ところで私は児童学科に勤務している関係で、短歌史の上で子どもがどんな風にうたわれているかということに、最近つよい関心を持つようになった。そこで、子どもを素材にした短歌にどんなものがあるかについて、多少まとめて考察してみよう、と思い始めた。

しかし、短歌といっても万葉集以来、何千年の長い歴史がある。古代でも山上憶良の「宴を罷るの歌」「子等を思へる歌」等の秀作が万葉集にあり、近世では橋曙覧あけらんの「独楽吟」の中のすぐれた子ど

も詠等、ちょっと思いつくだけでも、子どもをテーマにしたものが少なくないから、丹念に探したら、随分この種のものが見つかるだろう。そこで今回はあまり欲ばらないで、近代短歌に限って扱うことにした。

近代短歌といってもかなり期間は長いが、その始期はいつ頃かについては学者や歌人の間に色々な説がある。

しかし大体、明治三十年頃を近代短歌の成立期とみなすのが、大方の説のようである。というのは三派鼎立ともいふべき正岡子規の根岸短歌会の成立（明治31）・佐佐木信綱の「心の花」（始め「心の華」）の創刊（明治31）

・与謝野鉄幹の新詩社の結成（明治32）の三つが、明治三十年代の初期に期せずして行われているからである。

近代短歌と現代短歌との接点をどこに置くかについても、種々の考え方がある。『日本近代文学大辞典』（講談社）で「近代短歌」の項目を執筆した木俣修博士は「だいたい大正期までを近代短歌と呼ぶのが一般となっている」と述べているがそれは一応の基準であって、「近代短歌」という題名で昭和期をも含めて扱っている概説書も

あるし、逆に「現代短歌」という題名でありながら、明治・大正を含めて扱っている書物もある。そこで私としては、大体、旧派和歌に対して新派短歌が成立したと思われる頃から始めて、戦後の最近の著名歌人たち（現役の）に至るまでを漠然と含めて扱うことに致したい。編集部がこの連載を何回続けさせて下さるのかわからないが、しばらくおつき合いたい。

(1) 与謝野鉄幹

① 子の四人よたにりそがなかに寝る我が妻の細れる姿あはれとぞ思ふ

② 五人の子等いつたりが冬着ふゆぎに縫ひ直しさもあらばあれ親は着きずとも

③ その父はうち 打擲うちうちやくす その母は別れむと云ふあはれる児等こら

④ 蜜柑箱ふたつ重ねてめりんすの赤き切きしく我が子等の雛

⑤わが家の八歳やっの太郎が父を見てかける似顔なまがけは泣顔なきがらをする

⑥さびしげに群はれをはなれて小学の庭に立てるは父に似るかも

⑦わが家の五歳の次郎ふくらふの目つき大らかに語ことばすくなし

⑧わが次郎あぐらを組めば斧きりぎしを持つ人形にんぎょうの如くひざばしが出る

いずれも歌集『相聞あいごころ』から抄出した。『相聞』は鉄幹の第七歌集で明治四三年刊、上田敏への献辞があり、森鷗外の序文がある。挿絵や装幀は高村光太郎である。「明星」後半期の注目すべき歌集で、鉄幹の歌風の円熟が見られる。鉄幹は四十才ちょっと前の壮年期にあたっていたが、「明星」は明治四十一年に廃刊、文学活動の上でも、また、多くの子をかかえて生計も貧しく、生活的にもすこぶる苦しい時期であった。

あの輝ひかるかしい『みだれ髪』の著者であった妻晶子も、光・秀・八峰・七瀬ななせの四児を育てつつ、苦闘していた。

鉄幹は「光、七瀬、秀、八峰といりまじりわが幼児わがこどもの手をつなぐ遊び」とその子らを歌い、また生活やつれした妻を見て「わが妻のかたちづくらずなりたるを四十に近きその夫子の泣く」と、おのれのふがいなさを自嘲するかのようによびよっているが、①の歌もその妻子の姿を描いている。

中なか 咄同志社女子大教授はこれらの歌を「晶子への哀憐の情をこめた、身にしみるような作」(同氏著『与謝野鉄幹』昭56・2刊)と述べているが、子どもたちをおもろ親心の歌としてもすぐれており、それは、子どもたちの衣類としてつくろい物をしてやって、親の方は着なくてもかまわないのだ、という②の歌にもよく現われている、しみじみさせる。この頃は生活も窮迫し、種々の意味で心情的にも鉄幹は失意の時期であり、夫婦仲も険悪になってフト夫が妻や子を殴り、妻が別れ話を言い出すといった場面もあり、幼い子どもたちが心を痛めたということもあったらしいのが③の歌である。

余談であるが、私は家庭裁判所勤務当時、離婚調停の

席で相争う両親を見て、幼い子どもが不安におののくような表情を浮かべていた姿に接し、たまらなく胸が痛んだ思い出がこの歌を読むと蘇えるのである。しかし貧しい中にもたのしみはあるもので、鉄幹は「あたたかき飯に目刺の魚添へし六人の夕がれひかな」（夕がれひは夕飯のこと）ともうたっているが、④の歌も貧しき家の難祭りをあわれ深く詠じている。この「子等」というのは明治四十年に生れた女兒の双生児である八峰・七瀬（命名は森鷗外）であろう。蜜柑箱を二つ重ねて、その上にメリンスのうすい布切れを敷いて雛壇にするという素朴さは、こんにちの昭和の繁栄社会では思いも及ばないが、実際にわれわれの幼なかつた古き時代にはあったことであり、このリアルな具体的描写がこの歌を味わい深いものにしてゐる。

さて鉄幹夫妻の長男光氏は後年、医博・東京都衛生局長となり、また次男秀氏（故人）は後年、文才のある外交官となり（夫人は『どっきり花嫁の記』等の著で知られた与謝野道子、それぞれ知名人となつたのであるが、

その両親の幼時をうたつたのが⑤から⑧までの歌である。⑤⑥は光氏をテーマにしたもので、太郎というのは「去なしよ去なしよと思うていたが、太郎が生れて去なされぬ」（婚家の仕うちがあまりにも冷たくむごいので、嫁の私は、いっそのこと飛び出してやろう々々々、といつも考えていたが、長男が生れたのもう飛び出せない、その意）というどこかの地方の民謡にもあるように、一般に長男を指す。

⑤にはやはり自嘲をこめたベーススがあり、⑥はどこか孤独がちに見えるこの息子は、父である私に似てゐるのではないか、という「同病相あわれむ」式な複雑な親の悲哀がにじんでいる。⑦⑧は次郎、つまり次男の秀氏がモデルであるが、同氏の幼き日の風貌がこれらの歌には大へんユーモラスに描かれている。鉄幹の歌にはこういう面もあつたのである。

⑨泣顔を隠さんとして病める児の熱ある頬をば吸へる
その父

⑩ 病める児は赤しいたましその母の寝たらぬ顔は青し
醜し

『解の葉』所収。鉄幹の第八歌集で明治四十三年刊。兩作品とも歌意は明白であらう。⑨は病児への父性愛を示し、⑩は看病疲れで醜くなった妻と、高熱で赤い顔をしている子どもを描いている。この病児はチフスを病んだ長男を指すようだ。「窒^ナ扶^フ斯^スを病めるわが太郎、また夕方^{うわごと}は四十度に、熱こそ昇れ詭言^{うわごと}に……」と短詩風にうたった作品があるからである。

(2) 与謝野晶子

① 五人^{いったり}ははぐくみ難しかく云ひて肩のしこりの泣く夜となりぬ

② 夜をこめて小^こき襦^{じゆ}衣^いを縫ひいでしよろこびなどもあはれなるかな

③ 子等の衣^{きぬ}皆新しく美しくしき皐^{さう}月^{つき}一日^{いつ}花^{はな}あやめ咲く

前述の如く晶子は育児や生計のために大奮闘したのであるが、次男の秀氏は後年「千駄ヶ谷時代は既に明星の末期であり、世間的には華々しかった筈であるが、詩人の生活というものはいずこも同じであり、今日では想像も出来ない程惨めな所もあったと思う。当人達はその割に平気なもので、苦勞したのは唯台所を預る母一人というわけであった」(同氏著『一外交官の思い出のヨーロッパ』昭和56・10)と述べている。質屋も随分利用したし、原稿料を取りに出版社へ小学生の光や秀が行かされ、随分と待たされた話も伝えられている。晶子は実に十一人の子を育てたが、「おおぜいの子供を育てながら仕事にいそしむことのできたのも、人に倍する健康な身体と力を持っていたからであらう」「持って生れた徳とのか、どんなに貧乏していても、苦勞していても余裕と自信を持っていた、ひとには決してそんな感じを与えなかった」(秀氏、前掲書)という。

しかし超人ではない生マ身の間人であるから、短歌に

は①のように率直に苦勞についての愚痴のようなものを詠出している。五人(前述の四人に加うるに、その後生れた三男の鱗)の子を育てる生活苦をうたった作として、実感がある。「肩のしこりが……泣く」と擬人化して客観的な言い方をしている点に注意したい、と新聞進一青山学院大教授は述べている(同氏著『与謝野晶子』昭和56・12)。この歌は第九歌集『春泥集』所収である。

②と③は第八歌集『佐保姫』に収められているが、②は貧しい生活の中にも子らのために母としてつくす喜びをうたっていて、心うつものがある。

③は新詩社同人の平野萬里が「晶子さんは……その本質はやはり抒情詩人であった。何よりの証拠はその衣装道楽である。女らしさと芸術家氣質とが混合したものである。従って少しでも余裕が出来れば御子さん方の衣類も新調されたであろう。従って斯ういう歌が出来るわけである」(平野『晶子鑑賞』昭和24・7)と、この歌について述べているのが参考になる。

④胎の児は母を噛むなり影のごと無言の鬼の手をば振るたび

⑤その母の骨ごとく砕かるる苛責の中に健き子の啼く

⑥あはれなる半死の母と息せざる児と横たはる薄暗き床

第十歌集『青海波』所収の作品群である。晶子は明治四十四年二月、六度目の出産をした。双生児であったが、難産で、四女宇智子は無事生まれたが、他の一女は死産だった。晶子自身の「産褥の記」という文にその折の苦しみが綴られているが、また、「わたしは胎内で妹の栄養を奪い取った恐ろしい子と、母の印象をわるくしたようである」(与謝野宇智子『むらさきぐさ』昭和42・11)と、子ども自身の回想にもある。

抄出した三首は一種の悽愴味すら湛えていて、殊に④などは鬼気せまるような象徴的な比喩がある。世には出産をうたった歌は少なくないが、死産をうたったものは

あまりないのではあるまいか。⑤は生まれた子、⑥は死産した子をそれぞれ描き、かたわらに臥す母である自らをも描出している。

(3) 落合直文

順序からいえば鉄幹よりも、むしろ直文を先にすべきであろう。直文は明治二十六年「浅香社」を結成して短歌革新の第一歩を踏み出したが、鉄幹はその門下の一人だからである。ただ直文の歌風は清新な趣があり、すぐれた作品が少なくないが、未だ旧派の詠風を抜けきらぬ新旧折衷のところがあった。その中で、子どもを素材としたものに佳作が多い。

①父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

②霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのばゆ風の寒きに

③明けなばと羽子板だきて母のもとに寝たるわが子よ
罪なかりけり

④父と母をいづれがよきと子に問へば父よといひて母
をかへりみぬ

⑤さくら見に明日はつれてとちぎりおきて子は寝ねたるを雨ふりいでぬ

⑥小屏風をさかさまにしてその中に寝たるわが子よ
おきむともせず

直文は東大古典講習科に学んだ国文学者で、のちの一高・早大を始め多くの学校で教鞭をとったが、生来身体が弱かったのに精励したためか、僅か四十三才の壮年で明治三十六年に逝去している。家庭的にも不幸で、鮎貝家から養子に入ったが最初の妻竹路（彼女との間に二人の男子を挙げた）とは離婚し、二度目の妻操子との間に四男二女が生まれたが、その中、二人の男児と一人の女児は乳児で死亡している。直文は家族をいとしみ、門下を愛し、交友に情義の厚い、誠実な人物だったようであ

る。生前に歌集なく、没後に門人らの手で『萩之家遺稿』『萩之家歌集』（萩之家は直文の号）等が刊行されている。

①は「明治三十二年の春、病にふしてよめる歌どもの中に」と詞書のある連作中の一首である。上野山に花が盛りだ、という報などを聞きつつ、作者はたれこめて久しく病んでいたのであるが、この「問ふ子」は当時七才の次女澄子だといわれる。「上句は芝居がかって仰々しく、下句はへ問ふ子を見れば」が間のびしている。歌としてはアンバランスで決して成功作とは言えない。……しかし、人間味のある氣息がまつわっている。」と前田透成蹊大教授は述べている（同氏著『鑑賞 直文・槐園・躬治』昭52・6）し、本林勝夫共立女子大教授は「へ今朝はいかにと手をつきて」という表現に抵抗を感じるだろうが、今ならへお父さん、どうですか」といったところである。きちんとすわって朝の挨拶をするというのは武家風なしつけ方の残っている家庭ではふつうのことだし、その素直さがかえって作者の心にいじらしさをそそ

るのである」（同氏著『現代短歌』昭41・11）と鑑賞している。

②は翌三十三年作だが、これまた真情溢れる作で、私に大好きだ。私は旧制中学時代にこの歌を国語教師に教わって以来、今もって長く愛誦している歌なのである。

「安房にて」という注記のある一首で、この「わが子」というのは明治三十年に双生児で生れた直兄（弟直弟は夭折）だろうという（前田、前掲書）。子どもの状況が眼に見えるようである。直文は「明治三十二年十九才の時に糖尿病となって、駿河台の病院に入院し、さらに湘南や房州などに転地するようになった」（矢吹弘史『落合直文』昭和18・6）。この②は療養のため千葉県北条町（現在の館山市）の海岸に転地（明治三十三年一月）した頃の作であろう。「しのばゆ」は「しのばれてくる」の意。

③から⑤までの歌も、いずれも子どもの生態を実に活き活きと伝えている。「明日になったら羽根つこう」と羽子板を抱きしめて寝る子、「お父さんが好き」と答え

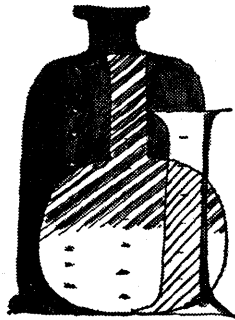
ながらチラと母親の方を盗み見る茶目っ気のある子、
「明日は花見に連れてってね」とせがみつつ子は寝たの
に雨が降り出したうらめしさ……。いずれも子煩悩の父
親である作者が髣髴し、人間直文をよく示している。

⑥は深刻な歌だ。「子のうせにし折」と注記がある。

一、二句に死出の床であることを示し、夭折したものの言
わぬ子を突放したようにうたっている表現が、却ってあ
われ深さをつたえている。「温情溢るるという態の人」
(矢吹、前掲書)といわれた直文の歌は、子どもをうた
うときにその人柄を端的に示したように私には思われ
る。

(未完)

(お茶の水女子大学)



子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑧

水 沼 昭 子

「Rちゃんて、眼が見えなくても平気なんだね、せんせい!」「手や耳でわかつちゃうんだよ、すごいね」未熟児網膜症で全盲のR子が入園して来た時、年長の女の子達がR子のまわりを取り巻いた。一週間ほど皆でR子の手を引いて園舎のあちこちを案内した。私達保育者はR子の入園に際して「ごくあたり前」を大切にしようと話しあっていた。だから取りたてて盲児である事を子供達に強調したり、父兄に「Rちゃんに親切にしてネ」と言わせたりしない様にして来た。

けれど入園してすぐに年長の女の子数名がR子の

お世話係になっていた。気にはなったが、そのまま見守る事にした。まさに、手取り足取りの介助ぶりである。R子のため……と云うよりも自分達の安定のためにお世話しているような年長児。無論、そんな事はご本人達の意識にはあるはずがないが、R子をかこむ、どの子も、年長になって新入園児がやって来たそのおちつかない雰囲気呑まれて、自分の遊びの場を見つけ出せずにいる様な子たちであった。

「親切」の洪水の中である日、R子は大声で泣いた。皆、戸惑ったり驚いたりしてR子を見た。いよ

いよ私達の出番がやって来た。せっかく親切にしてあげてののにどうしたのか——と云う様な困った表情の子供達の前で、R子に聞いてみる。

「Rちゃん、どうしたの」「あつちがいいんだ、あつちへ行く」と泣きながらR子は答える。「ひとりで行けるよ」とさらに訴える。「そうか、Rちゃんは一人で歩いてみたいんだね、じゃ、泣かないでそう云えばよかったのに——。おねえさんたちびつくりしてるよ」と言葉を返す。

年長児達は彼女達にとって思わぬ出来事にキョトンとしている。「どうしてなの? 眼が見えないのに——ぶつかったり、まいごになるよ」「自分の部屋わかんないよ、きつと」、不思議そうな表情で私に問いかけてくる「皆だって、一人で遊びたいときあるでしょ、Rちゃんだって、そうなんだとおもうな」「だってせんせい、Rちゃん、眼、見えないんだよ」その事を先生は知らないの! と云わんばかりの言葉の前で、私は言った。「眼は見えないけど、

手や耳が、その代りをするんだよ」そう説明しながら言葉を使いすぎて納得させようとしている自分にいやな思いがする。

年長児たちは「なんだか、わかんないけれどRちゃんも泣いてるし、先生も大丈夫って云うから——」そんな気持でR子を一人で歩かせた。この出来事があってから、数ヶ月もたって「眼が見えなくても平気なんだね」「手や耳でわかつちゃうんだね、ほんとに」——あの時のお世話役のY子が私へ報告して来たのだった。Y子は、あのR子が泣いた日以来、いつも遠巻にしてR子をみていた。「困ったら助けてっていつてね」そう云ったY子。

そのY子が秋も深まった園庭でR子の前に立った。ちょうど、その近くで他の子供に関わっていた私の視線にR子とY子が入って来た。突然Y子はR子に落葉を手渡した「これなんだ?」手の中で落葉がカサコソ鳴る。「はっぱ!!」R子がうれしそうに答える。「あたり!」Y子の声。次にY子は石ころ

をR子に渡す。R子の手が石ころをなでる「石ころ！」「あつたり！」又、Y子は他の物をR子の手に乗せる。R子は答える。「あつたり！」

その光景をオヤと思い、次にドキリとする。Y子はR子を試しているのだ。子供らしい表情をいっぱいにして次々と試している。彼女の眼にとまる、いろいろな素材をR子の手へ渡す。R子はゲームでもしている様にうれしそうに答える。

Y子は「すごいナ」「また、あたった」といいながら、とうとう自分のスモックのポケットのアプリケ、チューリップのアプリケをR子にさわらせる。「こんどは、いっとう　むずかしいやつ！」

こうした場面に出会ってしまつて、私の心はおちつかなかった。「もし、あたらなかったら、どうしよう」「この場を逃げだす口実はないか」一見残酷なこの光景の前で弱腰になる自分を感じた。R子はアプリケをさわる。なでまわす。しばらくして

「おはな」と答える「そう　やっぱり　あたり、あたると思つたよ」Y子は、「やっぱり」に力を入れて言う。——　そうしてY子は私に報告をしたのだつた。

私は言葉を使いすぎる。説明、解説……わかりやすく話す……。子供たちは「言葉」で知って行くのではない。自分たちが体験すること、自分流のやり方で理解して行く。子供たちにとっては「あたり前」の、また、一番、理解しやすい方法をみつけて仲間との関わりを持つとうとする。Y子とR子のやり取りを見ながら、おとなの思い過しや、薄っぺらい同情の思いが私の心に起つた。「まずい事がはじまつた」とも思つた。

しかし、Y子の思いは純粹で、R子を理解するための子供らしい方法であつたのだ。あれ以来Y子は安心してR子から離れたし、本当の仲間の様に対等な遊び相手になつていった。（千葉・愛隣幼稚園）

子どもの気持の表現にふれるとき (2)

——水遊びを通して——

唐 木 久 枝

水がなくても、だいじょうぶ

そして、冬休み、Bは、頭に三針縫うというけがをしてしまいました。三学期がはじまりましたが、けがのため、水遊びはやらないほうがよいとのこと。いろいろ考えました。確かにBは、水遊びが大好きです。でも二学期の後半の様子から、保育者が、しっかり受けとめれば、

水なしでも充分に過ごすことができるように思えました。また、庭の外水道は、他の先生方にも協力してもら

い、ノブをはずして使用しないで様子を見ろということ
で、Bに登園してもらいました。登園初日、Bには理解
できなかったでしょうが、とにかく、水遊びのできない
理由をしっかりと説明してみました。内容は理解できなく
ても、気持だけでも伝えたいと思ったからです。私達の
心配をよそに、Bは、水がなくても、しっかりと他の遊
びをして過ごすことができたのです。

記録より

。登園すると、しばらく室内のおもちゃ（ビズィーボッ
クスなど）で遊ぶ。そして、はだかになり庭へとび出

す。すぐにブランコへ行く。私が大きくこぐと、声をたてて笑う。ブランコからおりると、庭を走りまわる、私が追いかけると、声をたてて笑う。水道の所へ私をひっぱってゆき、水を出すよう要求する。水を出せないことを伝えると、私の手をひいてブランコへ行く。(1月17日)

二学期後半、それほど、執着しているようには見えませんでした。やはり、Bの園での生活の中心であり、Bが、何かを表わす第一の手がかりとしての水が出ないことを、Bはどのように受けとめたのでしょうか。あまりおとなに對して、強く要求を出さないBだけに、氣持が内向しなければよいが……、との心配も、少しはありました。しかし、逆に、このチャンスにひとにむかいはじめた氣持をしっかりと育ててみたい、との期待もあったのです。

水を使わずに、一週間が過ぎました。その間、Bは、何度か、水を出すよう私を水場にひっぱってゆきました

が、出ないことがわくと、泣いたり、おこったりということはなく、すぐに他の遊びに私の手をひいてゆきました。

記録より

1月18日

。登園すると、入室しないで、すぐに庭で遊びはじめる。砂場の藤棚につつてある綱のブランコにのる。次に、二人用のブランコにのる。その後、室のロッカーの所へ行つて、はだかになり、庭へとび出す。庭を声を出して走りまわつた後、また、ブランコへ行く。
。お弁当は、昼食時に、庭へ持つて出て食べる。お弁当を食べる時は、服を着る。

。午後、室内の子ども用すべり台を庭に持ち出すように私に要求し、庭で砂をすべらせて遊ぶ。

。自分から、庭の自動車にのり、私に押させる。

。トラクターのおもちゃを手で押して走らせる。

1月21日

。登園後、すぐ室のロッカーの所へきて、はだかにな

る。庭にとび出し、声をたてて走りまわる。その後、私の手をひき、砂場のブランコにのり、私に押すよう要求する。

。お弁当は、庭のいつもの所で食べる。

。午後、庭の見わたせる二階のベランダへ行き、私にベッタリと抱っこをしてあまえてくる。

1月22日

。登園して入室。ロッカーの所へくるが、すぐには服を脱がず、しばし、あたりをキョロキョロする。そして、服を脱ぎ出すが、その途中、虫の本をみつつけ、そのまゝ、本をみる。見終えると、はだかになって庭へとび出し、声をあげて走りまわる。その後、私の手をひいて、ブランコへ。私ものると、ひざの上にすわる。お弁当は、庭で食べる。

。砂場で、砂をけちらしたり、ボールをけって遊ぶ。

1月24日

。ロッカーの所まできて、ちょっとしたの間、服をきたまま、いろいろなおもちゃ（ビズイボックス・文字あそ

びなど）で遊ぶ。その後、はだかになった庭へとび出す。庭を声を出して走りまわった後、私の手をひきブランコへ。私のひざにすわり、ゆったり、のんびりすごす。

。抱っこの要求の多い一日。

この一週間の遊びの中で、Bが、水遊びをしていた時と、同じような感じをうける遊びがあります。それは、はだかになって、庭へとび出し、庭中を声を出して走りまわることです。時間としては、わずか2〜3分ですが、Bの内部にたまったエネルギーを、まとめて表出しているように思われるのです。そして、Bは、庭を走りまわった後、「さあ、いっしょに遊ぼう」という感じで、私の手をひきにきます。この時の感じは、二学期に、水遊びを終えて、私の所にやってきた時と、似ています。また砂場で、かわいた砂をけちらす遊びは、水たまりを、足でバチャバチャやっているのと、同じイメージをうけます。

これらのことから、Bが、それまで、水にむけて表わ

していたもの、水にぶつけていたものを、水がなくなっても、他の方法で、表わしているのを感じました。そして、それは、Bにとっては、水が、一番表わしやすいものであり、水を使って表わしてゆくうちに、それ以外の手段でも、表わせるようになったのではないでしようか。

そして、もっとも変わったことは、気持を直接ひとにむけてくれることが多くなったことです。二学期までは、傍観者であった私から、いつも、いっしょにいる私になったことです。それまでは、いっしょにいうとしても、とぎれとぎれだったBとの関係が、かなり持続的なものになってきたことです。

朝から、何度も抱っこを求め、しっかりと私の手をひいてすごします。遊びも、ブランコや、庭のいろいろな乗り物にのって、それを押してほしいという要求が多く、また、ひぎの上でのんびりすごす時間もふえていきます。

そして、記録からもわかるように、それまでは、毎

日、自分で決めたコース通りに動いている傾向が強かったのですが、少しずつ、そのパターンがくずれ、自由に動くことがみられるようになりました。私には、以前のBは、まわりをみるゆとりもなく、一心に自分のやるべきことにむかっていたように思えました。自分から、強い要求は出さないけれど自分が決めてやっていることを、とめられたりすることには、強い抵抗を示していたのです。それが、少しずつ、まわりに目をむける余裕ができ、緊張もほぐれていったようです。そして、少しずつ、他からの働きかけ、さそいかけ、受け入れるようになったのです。

皆といっしょに、いただきます

二月になりました。それまでは、さそっても、自分のお弁当をもって、庭へとび出していたBが、室でお弁当を食べるようになりました。

記録より

。お弁当にしようときそうと室にやってくる、お弁当を持て、ちょっと室から出ようとするが、さそうと席につき、室で食べる。(2月7日)

九月の早弁をしていた時から、一月まで、Bは、どんな寒い日でも、庭の決まった所でお弁当を食べていました。なぜそうしていたのか、そのことにどんな意味があったのかは、私にはわかりません。しかし、このような時子どもの行為をとめずに、保育者が、じっくりつきあうことが、子どもを安心させ、子どもの気持をこちらにむけさせてくれるのではないでしょうか。Bの場合も、まわりのことに目をむけ、気持にゆとりがでてくるに従って「お室でいっしょに食べましょう。」というさそいかけに、あまり抵抗なく、応じてくれるようになったのでしよう。といっても、きちんとすわって食べているわけではなく、けっこう遊びながら、楽しんで食べていました。

はだかん坊は最高

水遊びをやらなくなってからも、Bは、はだかで過ごす時間の方が長かったのです。でも、Bがはだかになるのは、園にいるときだけだったのです。家では、お風呂からあがったときでも、すぐに自分から、服をきょうとし、海などへ行つて、はだかにさせようとしても、とても、いやがったとのことでした。ですから園で、はだかで過ごすことには、Bなりの意味があったのでしよう。

Bは、はだかになると、パーッと庭へとび出します。そして、庭中を、歓声をあげて走りまわります。この時のBをみてみると、なにもかも脱ぎすてて、自由な自分を思う存分経験しているように感じます。

どちらかというと、自分の動きを、自分でパターン化しやすいBにとって、はだかになることは、その自分のパターンからぬけ出すための一つの手段であったようにも思えます。ただ、Bにとって、行動をパターン化する

ことは、社会やおとなからの働きかけに思うように答えられず、ふりまわされがちな自分を守るための行為であったようにもみえました。ですから、それを、少しでも崩すことは、Bにとっては、とてもたいへんなことだったでしょう。

帰りたくないな

三学期も終わりに近づくとき、お帰りの様子にも、さらに、余裕ができました。お帰りの時間になって、おむかえのお母さんの姿をみても、もっと遊びたい時には、遊び続けることもありました。

このように、Bも、私も、夢中にすごしているうちに、何かひと山越えたようなこの一年も、終わってしまいました。

幼稚園二年目のBは、さらに、気持を外にむけて表わ

すようになりました。時には、私達が、びっくりするほど、しっかりと表わしていましたが、時には、うっかりすると、見逃してしまうような小さなサインで表わしていることもありました。

新しい室、新しいお友達との新学期です。Bには、室の変ったことは、はじめ、少し抵抗があったようです。でも、すぐに、慣れてくれました。

この年のBは、もう私と一対一の関係だけでなく、クラス他の先生や、お友達を意識しての生活になりました。私以外にも、お気に入りの先生をみつけては、手をひいて、楽しくすごすこともありました。また、他の子どもにも関心を示し、ちょっとさわりにいたり、抱きついてみたりして楽しんでいました。

そして、ずい分積極的に、自分の気持を行動に出すようにもなりました。自分のもっていたおもちやをお友達にとられると、そのお友達をたたいたりもしました。また、私が他の子どもと遊んでいても、必要な時には、手

をひきにきてくれることもしばしばでした。

ただ、あまり、うまく気持を表わせなかったり、私が手をひかれても、なかなか応じられなかったりすると、Bは、パーッと水遊びに行つて水に気持をぶつけていたり、あるいは、昼食の時間でもないのに、お弁当をもち出したりして、私達にサインを送ってきました。

そして、この一年、とても変わったことは、お母さんとの関係がとってもスムーズになったことです。自分から、お母さんのひざに、抱かれにゆくようになったのです。お母さんもBのために、一生懸命でした。でも、時々、一生懸命すぎて、少しずつ、いろいろなことができるようにになっているBに、あれもやらせたい、これもやらせたいと、先まわりしがちになります。そんな時は、ちゃんとBが、お母さんのやらせようとしたことに対して、おこったり、おむかえのお母さんに対して、表情を固くするなどして、表わしてくれるのですぐに説明して気をつけてもらいました。

おわりに

現在Bは、愛育養護学校の小学部一年生です。登園すると、下駄箱で、靴をはきかえ、入室すると、きかえます。だれが教えたということもないのに、靴下を、靴の中に入れて、ロッカーの下におくのです。あたかな時にはやっていた水遊びも、寒い今は、ほとんどやらず、はだかですごすことも、ほとんどなくなってしまいました。水遊びをやっていた時期も、水遊びはBの好きな遊びの一つという感じで、時間的にも、5分から20分位やると、自分からやめて、タオルで体をふき、室のロッカーの所へ行つて、服をきるのです。ですから、水遊び以外で、はだかですごすことも、なくなっていました。

お弁当も、自分で机の上に用意し、おちついてすわって食べ、自分で、後片づけもするのです。

このように、具体的に、いろいろなことが目にみえて変化してきました。しかし、この変化は、Bの心の成

長、氣持の広がりについて付随して表われた、ごくごく一部のことにすぎないのです。

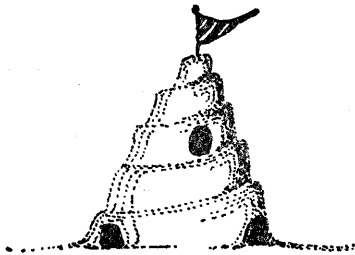
水をやらなくなったのも、はだかにならなくなったのも、Bが、それを、氣持を表現する一つの手段としていたからで、心の成長とともに、氣持を直接的に表わすようになったBは、おのずから、必要なくなったのでしよう。

私が、子どもと過ごす時、その子どもが夢中になってやっていて、その子なりに、何かを表わしているようにみえるのに、それが何であるかわからないことがよくあります。そして、それが何であるかを考え、時には悩みます。でも、最近、それが何であるかを、その時に、無理にわかろうとする必要はないのではないかと思うことがあります。子どもがそのことをやっていること自体に、その子どもにとっての大きな意味があるのでないでしょうか。ですから、私は考えすぎたり、悩んだりせず、それを、ゆったりと見守ることができたらよいと思うのです。

服を着ていても、自由に、のびのびと、明るい表情で遊んでいるBをみると、結局のところ、水遊びや、はだかに、とらわれていたのは、私であり、周囲のおとなであつたようです。

ある日、ひとりの先生に「Bちゃんは、水を通して成長したのね。」と言われました。ほんとうに、その通りですね。

(愛育養護学校)





ブリュージュルの「子供の遊戯」 6

——ナイフ投げから足蹴りごっこまで——

森 洋子

30、ナイフ投げ Mesken-sleek (図1)

前景右端で、二人の男の子が地面に膝をつき、ナイフ投げに夢中になっている。ベージュの上衣と同色のズボンを身につけた男の子が、ナイフの柄を右手の掌に、その刃先を口にくわえ、左手で地面の一点を指している。彼は次の瞬間、ナイフの柄を右手の掌でたたき、できるだけ目的の個所に近づけて刃を突き立てなければならぬ。もしそれに失敗すれば負けて相手の番となる。他

方、ブルーの上衣を着た男の子の方は、掛け声をかけているのか、あるいは相手のやり方に抗議しているのか、右手をあげて激しく話しかけている様子。

W・W・ニューウェルの研究^{註1}によると、二十世紀初期のアメ리카でも、このナイフ投げが盛んに行なわれたという。ニューウェルはかなり詳しくナイフの投げ方の種類を伝えている。

(1) ナイフをまず右手の掌に、つぎに刃を外側にむけて左手で持ちかえる。それから刃先が手前に来るように投

げる。

(2) ナイフを立てて右手の掌、それから左手にもち、つぎに脇の方に投げる。

(3) ナイフの刃先きを片方の手の親指と他の手の指（どの指でもよい）ではさみ、それから、外にむかって投げ



図1 ブリュエゲル「ナイフ投げ」・「煉瓦積みごっこ」（『子供の遊戯』の部分 ③④・③⑤）

る。

(4) 刃先きをしっかりと保ち、胸、鼻、目の高さの順で、外にむかって投げる。

(5) 両腕を交叉させ、どちらかの耳の上にのせ、手でつかんで投げる。

(6) 頭の上にナイフをのせ、後方へ投げる。

このナイフ投げはこうしてフランドルだけでなく、世界の各地で男の子たちによって興じられたであろうが、その投げ方にも色々なヴァリエティがあることが、このニューウエルの研究から知られ、興味深い。

なおラブレールの『ガルガンチュア物語』第二十二章にも「短刀当て」として列挙されている。

31、煉瓦積みごっこ Metselen (図1)

ナイフ投げの少年たちの背後に十七、八個の煉瓦が散在している。といってもよくみると、全体が円形をなしているのです、井戸の囲壁づくりの途中のようだ。すでに一部は煉瓦が積み重ねられ、また、一部は悪戯つ子に壊

されたようでもある。だが不思議なことに、子供の姿はみかけない。おそらく煉瓦が足りず他所へ探しに行ったのか、側で「髪の毛むしり」が始まり、恐ろしくて逃げていったのであろうか。

この遊戯名は一応、ド・マイヤーに従^{注2}い「煉瓦積みごっこ」としたが、確かにフランドルの子供の遊びに「井戸づくり」Waterputten maken という表現がある。^{注3}

このほか、「お家づくり」と解している研究者もいる。コックとテーリング^{注4}によると、今日でもブリュッセルで、道路の舗装工事のとき、子供たちが舗石や砂利をかき集め、家を作って遊んでいるという。この場合の家は「huis」(家)ではなく、「ketjes」(小屋)とよばれる。

既述した棒馬ごっこ(本誌一月号、十一頁)の中で、十四世紀のヒューゴー・トリムベルクの詩を紹介したが、そこで老人が子供と棒馬遊びをし、水浴に出かけ、「お家作りをするのを手伝^{注5}った」と謳われている一節も、情景としてはこうした煉瓦遊びを思わせるのである。

32. 髪の毛むしり Haarkeupluk (図2)

ひとりの男の子を囲んで、五人の子供たちが、彼の頭髪を無理やり引き抜こうとしている。いじめられる子供は左手でしっかり帽子を守りながら、右手で必死に抵抗する。その表情から、痛みのため叫び声をあげているようである。これはおそらくある特定の遊びで負けた子供への罰則ごっこなのであろう。Van Dale の現代オラン



図2 ブリュエール「髪の毛むしり」
〔「子供の遊戯」の部分 ㊸〕

ダ語辞典にも、この遊びを思わせる pandverheuren という語があり、そこには「遊び仲間の誰かが負けて、担保を要求され、後に償わなければならないグルーブ遊び」と記されている。その遊びとして、ハイディング^{注6}は35の「帽子、帽子を脚の間から」と関連づけている。つまり帽子投げ遊びで負けた子は、通常、仲間から頭をなぐられるのだが、時にはその代わりに、「頭髮をむしられる」こともあり、その行為がこの情景という。すでに十六世紀のドイツの詩人ガイラー・フォン・カイザーベルクがその著『福音書』の中で、こう述べている。^{注7}

「君はこれまで見たことがないかい、

少年たちが学校で互いに競争し、

三、四本の髪の毛を引き抜いているのを。

だがそれ位ならまだ気がつかないにちがいない、

もしそうだとすると、

子供たちは髪の毛をまとめて引っぱる、

そしてそれをしようとするとき、

相手のほほを強くなぐる、



図3 ヘラルト・ホーレンベルフ「ゴルフ遊びと髪の毛むしり」(『時禱書』11月の部分) 1510年頃、アントウェルペン、マイヤー・ヴァン・デン・ベルフ美術館
HSS 946

それがとても痛く感じると、
髪を抜かれても何も感じないからだ。」

一五四〇年前後に、ブリュッヘ(ブリュージュ)の細密写本工房で彩飾された時禱書にこの遊びが見出されることは、きわめて興味深い。この時禱書はヘラルト・ホーレンベルフの工房で制作されたと推定されるが、十一月のフォリオの上部の飾縁をみると、中央に「射手座」



図4 ブリューゲル「昆虫を捕える」「子供の遊戯」の部分③

「髪の毛むしり」のすぐ背後で、地面に置かれた大きな木に這い上っている子供がいる。彼はハンマーかゴルフのクラブのようなもので、木の皮をはぎ、中に隠れているハサミ虫などの昆虫を捕えようとしている。こうして得た昆虫はボール紙や板の上に虫ピンで留めら

の記号、そして左側に「髪の毛むしりとゴルフ遊び」(図3)、右側に「ゴルフ遊び」が画かれている。こうしてみると、この髪の毛むしりはゴルフ遊びと何か関連があり、何回か反則を犯した場合、約束にしたがい、髪の毛をむしられるのかもしれない。

33、昆虫を捕える Torren vangen (図4)

れた。板の上でピクピクと虫のあかく回数で、子供たちは将来、いつ結婚するのか、子供は何人生まれるのか、お金持になれるのか、何歳まで生きられるかを占って、楽しんだのである。^{注8}

しかしまた子供たちは虫ピンで留めたりせず、長い糸にしぼって飛ばせたりもしたらしい(本誌十一月、三十三―四頁の「小鳥遊び」を参照)。

34、ヴォラールト遊び Spel met den Vollaard

(図5)

「昆虫を捕える」少年のすぐ前で、三歳位の女の子が背丈ほどの大きな長いパンを大事そうにかかえている。この特別の形のパンについて、研究者は色々な名称で呼んでいる。ド・マイヤーは「ヴォラールト^{注9}」と名づけているが、これは古の祖先たちが古代ローマの異教徒から習ったパンで、新年に供物として神に捧げられたのである。それがキリスト教時代には「天使のケーキ」とよばれ、彩色された丸い陶板の飾りがパンにつけられた。さらに

十六、七世紀のフランドルでは、キリスト教の御絵（版
画）に、このヴォ랄ルトが描かれ、こう記されていた。

「おお、可愛いイエス様よ、

あなたはまことわれらのための、

聖なる新年であられます。」

また民俗学者のJ・ウエンスは^{注10}このヴォ랄ルトは十二月六日の聖ニコラウスとか新年の祝祭日に焼かれる飾りのある大きな長バンで、子供たちへの贈物となると述べている。さらに彼は今日でも、ベルギーのブランケンベルフの「バン屋通り」Bakkersstraat ではこの種の



図5 ブリュージュ「ヴォ랄ルト
運び」（「子供の遊戯」の部分④）

バンが焼かれていることを指摘している。

ほかにハルトマンとレンス^{注11}は、この長バンをコリント

・バン（干しぶどう入りバン）と呼称し、夏の終りを祝う九月二十九日の聖ミカエルの日に焼かれると述べている。その夜半過ぎ、両親は子供たちの枕の下にこっそりとこのコリント・バンをプレゼントするが、その翌朝、子供たちはバンを発見し、それをかかえて町中を歩くのであった。このほかヘフラ^{注12}は、「約四十八センチの長く太いお菓子バンで、上と下に頭部が形づくられ、中間部が幅が広い」と記している。

この「ヴォ랄ルト運び」の子供はブリュージュの画面で木靴をはいている唯一の子供で、さらに注目すべきは頭に紙の冠をつけている。この冠は既述の17の「いくつもっている」や26の「風船遊び」にも画かれていた。

これまでこのバンと関連する祝祭日は新年、九月二十九日、十二月六日と様々であったが、この少女の紙の冠そのものは一月六日の東方三賢王礼拝の祝日か、二月の謝肉祭のいずれかを表わすのであろう。しかしブリュージュ

ルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」には、紙冠はあっても、ヴォラールトは画かれてないので、この女の子は季節的には一月六日の東方三賢王のひとりに扮しているのだろうか。

35、帽子、帽子を脚の間から

Hoedje, hoedje door het been (図6)



図6 ブリュエゲル「帽子、帽子を脚の間から」(子供の遊戯」の部分⑤)

すでに32の「髪の毛むしり」で述べたように、この遊びは一種の帽子投げである。まずひとりの子供が帽子を目深に被り、盲ら鬼にされる。彼は大きく脚を開くと、仲間がその間から自分の帽子をできるだけ遠くへと投げる。ハルトマンとレンス^{注12}によると、子供たちはこの時「走れ、口、走れよ」と呼ぶという。この場合の「口」は奴という意味であろう。盲ら鬼はそれから地面に投げ出された帽子にむかって走り出す。最初に踏んだ帽子の持主は、即座に逃げ出さねばならない。他の男の子たちが自分の帽子を拾い、この新しい鬼を追いかけて、帽子で殴るからである。

これに対して、ド・マイヤー^{注13}は全く異なった遊戯を説明している。彼はこれを「暖かい手」のヴァリエーションのひとつと考えた。つまり帽子で目隠しされた男の子は二人の男の子の肩にかつがれる。彼は両手をびったりと両ももにつける。それから仲間がその手の上に触るのだが、盲ら鬼は誰の手かを当てねばならない。当たったならば、盲ら鬼は交代。ゆえにド・マイヤーは「盲らかつ

き」³⁶ Bindemannetje rondragen と呼称した。だが、盲ら鬼の足は実際には地面についていて、仲間の肩にかつがれているわけではなく、また帽子の説明も不十分のため、ド・マイヤーの記述は正しくないように思われる。

36. 兔跳び Haasje over (図7)



図7 ブリューゲル「兔跳び」(「子供の遊戯」の部分③)

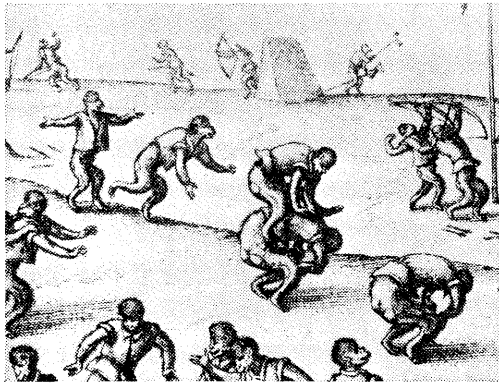


図8 ピーテル・ヴァン・デル・ポルト「兔跳び」(「猿の遊戯」の部分) 銅版画, 1580年頃

この遊びはブリューゲルの画面では六人で行なわれる。兎役になった子供は背の高さによって膝頭か足首を両手でしっかり押え、体を曲げる。もし跳び手の邪魔をしたい時は、垂直に立つようにする。

わが国では一般に「馬跳び」とよばれるが、ヨーロッパでは種々の名がつけられている。フランドルでは他に over 't lijken 「小さな身体を越えて」と

いい、英語で leap frog 「蛙跳び」、仏語で saute-mouton 「羊跳び」、独語で Bockspringen 「牡山羊跳び」とよぶ。とくに興味深いのは、ドイツでは子供の体の曲げ方によって、跳び名が変わり、頭を進行方向にむければ、「山羊跳び」、横に出せば「ハンマー跳び」などとよばれる^{註14}。

ブリューゲルの絵からヒントを得たピーテル・ヴァン・デル・ポルトの「猿の遊戯」(図8、一五八〇年頃)にこの遊びが画かれていることから、当時すでにポピュ

ラーな遊びだったと思われる。

この遊びを謳った十七世紀のオランダやフランドルの詩をいくつか紹介しよう。まず十七世紀の無名詩人の『児童の書、または子供の遊戯の寓意』にこう謳われている。

「背中の上を跳んでいる、

みてごらん、どんなにか速い脚で

他のひとの上を跳んでいるか、

他のひとが跳び越すまで、

体をずっと低く曲げている、

前のひとがやったことを、

後のひともしやり、

そして前のひとに続くのだ。^{註15}」

ジャック・ステラはフランドル生まれの詩人だが、そのフランス語の詩集『子供の遊戯と楽しみ』（一六五七年）では、動物の名前ではなく、「ポスト」（図9）と題している。

「一列に並び、軽やかに、

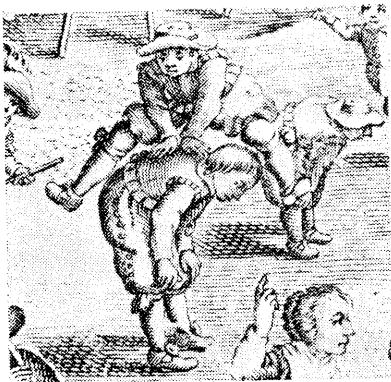


図10 E. シリマン「兎跳び」（カッツ『結婚について』1642年より）銅版画

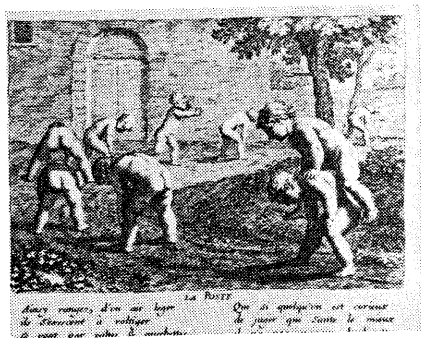


図9 クローディン・ブゾネ・ステラ「ポスト」（ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より）銅版画



図 12 「兎跳び」 オランダのタイル画
17世紀中期



図 11 「兎跳び」 オランダのタイル画
17世紀後期

ひらりと跳び越す練習をする、

跳んだり、体を曲げたり。

もし誰かが好奇心をもって、

誰が一番上手に跳ぶか、

審判するなら、

眼鏡などはいらないさ。^{注16}

この二つの詩は、子供が元気に跳躍する様を謳っているだけだが、十七世紀のヤコブ・カッツは人生への警鐘として、こう寓意的に謳い上げている（図10）。

「みてごらん、どんな風に子供は、

仲間を下に押し、跳んでいるかを。

みてごらん、どんな風に傲慢な者が、

すべての子供の上を越えて行くか。

しかし、どんな風に遊びが終り、

その運命が逆転するかを、

みていてごらん。

しばらくの間、体を低くしていたひとは、

ふたたび、生々していることを示す、

かつて高く跳んだものは、

すべて小さな仲間を抑圧したが、

今はふたたび自分の頭を低くする、

彼の当初の権力が奪われたかのよう^{註17}に。」

なお同時代のタイル画でも、この「兎跳び」が好んで描かれたようだった(図11、12)。図11のタイル画の直接の範例は、図10の版より早い一六二五年版のカッツの『結婚について』の挿図版画(ヤン・ヴェルストラールン刻)と思われる。

37、線の上で引張る Trekken over de lijn

(図13)

この遊びは二つのグループによって行なわれ、各々三人ずつから構成されている。つまり、リーダー、馬、騎士役の子供が互いに仲間に助けられながら紐を引張り合い、相手を線の内側に踏み入れさせたら、勝負がつく。ちょうどわが国の「綱引き」に似ているが、フランドルの遊びは、もっと複雑で、途中で騎士が落馬すれば

負けである。ブリュ

ーゲルは左側のグル

ープをはば背後から

描き、各々が力を入

れてふんばっている

様子を強調。それに

対し、右側のグルー

プでは騎士とリーダ

ーの赤潮した頬や、

馬役の男の子がリー

ダーの腰紐に引っか

り掴まって頭をうず

めている様子を見事

に表現している。

ドローストはこの遊びを「綱を引張る^{註18}」、ハイディン

グは「騎馬合戦^{註19}」、ハルトマンとレンスは「石の上で引

張る^{註20}」などと呼称しているが、すでに古代ギリシャ時代

では *Dielystinda* として知られていた体育のひとつだ



図13 「線の上で引張る」(ブルーゲル「子供
の遊戯」の部分⑦)

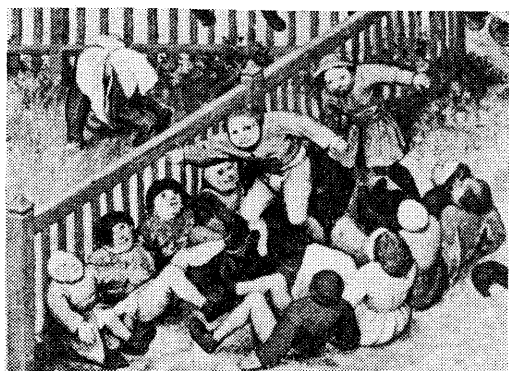


図14 「足蹴りごっこ」(ブリューゲル「子供の遊戯」の部分⑳)

った。つまり二人の少年が互いに向い合い、どちらかの側へ引張るといふ運動として行なわれたのである。^{注21}

38、足蹴りごっこ De Spitskar (図14)

ブリューゲルの画面全体でもっとも多い人物のグループ遊びである。いや遊びというよりは、32の「髪の毛むしり」と同様、

反則を犯した仲間への罰則ごっことも考えられる。子供たちは五人ずつ二列になり、両足を前に出す。そこを二人の男の子が通過しなければならぬのだが、

仲間たちはかなり乱暴に足蹴をし、二人を前進させないように妨害する。そのため、二人はかなり高く、巧妙に跳ばねばならない。しかし子供たちの表情からこの罰則ごっこは「髪の毛むしり」ほど残酷でないことがうかがわれる。ド・マイヤー^{注22}はもとの遊びが「ハンカチ落とし」であるといい、コックとテールリンク^{注23}は「橋ごっこ」と述べている。後者は37の「線の上で引張る」に関連した一種の「綱引き」で、それぞれのリーダーのもとに子供たちが二列に相対し、綱を張り合うのである。そして敗けたグループがこの足蹴の刑罰をうけるのである。

ところでこの罰則ごっこは軍隊での排列撞刑を模倣しているようだ。オランダ語では *door de spitsroeden loopen* といわれ、Van Dale の現代オランダ語辞典によると、規則に違反した兵隊が上半身裸になって、苔をもつて二列に並んだ兵隊たちの間を通過しなければならぬ刑罰がある。罰は仏語で「カウディネ隘路を通る」*passer sous les fourches caudines* ともいわれるが、これは古代ローマ時代の故事に溯ることができる。カウデ

「幼児の教育」復刻記念論文

審査経過の報告（審査委員会）

八〇年の伝統を持つ保育誌の復刻記念という土壌と、「幼児の教育」誌を素材とするという条件のゆえか、保育史関係の論文が目立った。

中では、金子真知子氏の「生活主義保育の源流」が、明治三〇年代の関西保育界の動向、とりわけ三市聯合が神戸保母会の脱会によって変貌する経緯を、詳細に考証した力作であった。意欲的な資料の発掘と慎重な照合を通して、三市聯合分裂のダイナミズムを、「生活主義」という教育思潮の上に位置づけ直し、従来の定説を修正しようとする試みである。

一方、国吉栄氏の「初代編集者東基吉

を通してみる『幼児の教育』創刊の時代」は、復刻された本誌を最大限に活用しつつ、保育ジャーナリズムの黎明期を照射しようとする魅力的な試みであった。氏もまた、従来の定説を問うところから出発し、結果として、その輪廓を追うほどに不鮮明にかすんでいく人物像に寄り添いながら、編集者に負わされる影の部分の浮き彫りにし、啓蒙誌の宿命を指し示すのである。

興味深いことに、両氏の論文は、共に明治期の保育史に課題を設定しつつ、それぞれに対極的な二つのタイプを分け持っていた。すなわち、パズルを解くよう

な綿密さで資料の照合をくり返し、飽くまでも資料を重ね合わせることで核心に近づこうとする前者の求心性と、資料の解説に独自の視線の投入を試み、そこから新しい意味の世界を開示していこうと試みる後者の遠心性である。歴史とは、過去の事実の集積なのか、或いはまた、意味の跳梁する王国なのであろうか。新しい歴史学に投げかけられた二つの問いが、はしなくも、この二つの論文に分け持たれていて、限らない興味を誘われた。結果として、この両者に、優秀賞を分け持つて頂く次第となった。

私見をつけ加えるなら、金子氏の場合、問題を、「生活主義との関連」という、教育学上の一局面に限定してとらえることと、明治期日本の近代化とその振幅という、思想的・文化史的文脈の上に位置づけることの、どちらがより豊饒

であろうか、という問いが残った。関西保育界の分裂という、大局的に見るなら所詮瑣末事に過ぎない事件から、何を逆照射させ得るかは、真剣に問われねばならない学問的な課題であろうと思うからである。

国吉氏に対しては、その解説に対して、一層の鋭さと深さを期待したい。そして、より立体的な意味把握、つまり、解説の錘が単に表層に止まらず、より深部まで下ろされるならば、資料は単なる実証の道具であることを止めて、意味の世界を呼び覚ますメタファーとして、より有効に機能するのではないかと考える。

現場人として、肉体を勞しつつ日を送りながら、なお、この募集に応じられた大槻、小坂田、松江三氏に対しては、一言、その意欲と勞をねぎらっておくべき

であろう。実践に密着したその論考は、

いわゆる「論文」の形には必ずしも嵌まっていなかったが、それもまた、保育研究のあり方に対する一つの問題提起として受けとめたいと思う。

なお、復刻誌の活用は、必ずしも歴史研究に限られるものではない。その意味では、誌上から拾い出した一つの視座によって、自身の実践を見直すという、小坂田氏の試みはユニークであったが、残念ながら、充分に成功したとは言いが難かった。同氏をも含めて、奨励賞の四氏の、今後一層の実践と研究の充実を期待している。

最後に、応募論文を通じて、審査員一同も教えられるところが多く、様々な課題を投げかけて頂けたことを感謝したい。

（文責・本田）
尚、審査委員は復刻刊行委員と本誌編集委員とで構成されました。

幼児の教育 第八十一巻 第五号

五月号 © 定価二七〇円

昭和五十七年四月二十五日 印刷
昭和五十七年五月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

新刊

幼稚園教育早わかり一問一答

文部省幼稚園教育課内・幼児教育研究会編

A5判・276頁・定価1,200円

幼稚園教育の基本的な考え方と保育の疑問点に対する解説書です。

幼稚園教育とはどんなものか、その重要性を初め、行政面・保育内容面・園の施設と運営面など、さまざまな分野に渡って、その疑問点について解説を加えた手引き書です。

問答形式にまとめているため、保育経験の少ない保育者から、保育科の学生に至る若い人たちにも分り易く編成されています。

また、幼稚園のみを対象にまとめたもので、公・私立の問題を公平に取扱っているために、幼稚園関係者すべての方々の必携の書として役立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

新刊

幼児をのばす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

保育をするに当って、保育者としてこれだけは身につけておきたい基礎的な考え方や、保育のおさえどころを解説したものです。保育目標を達成するための保育計画作成という大きな仕事に対して、初心者に分り易くするために、領域的な考え方を取り入れて、作成方法をまとめた実践例つき指導書です。

- | | | |
|---------|----------|---------|
| ①保育の視点 | —ここがポイント | 海 卓子・著 |
| ②指導計画 | —ここがポイント | 高杉自子・著 |
| ③絵画の指導 | —ここがポイント | 林 健造・著 |
| ④音楽の指導 | —ここがポイント | 早川史郎・著 |
| ⑤体育の指導 | —ここがポイント | 三宅邦夫・著 |
| ⑥自然の指導 | —ここがポイント | 小山孝子・著 |
| ⑦ことばの指導 | —ここがポイント | 阿部明子・著 |
| ⑧ごっこ遊び | —ここがポイント | 笠間典美・著 |
| ⑨園行事 | —ここがポイント | 仲田あつ子・著 |
| ⑩母親対応 | —ここがポイント | 本吉圓子・著 |

B6判・セットケース入り・平均208頁・セット定価 9,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館